

暁
の
大
地

5

成
尾

陽

目 次

八、綾の聖地 ◆ 7

出会いの地 ◇ 7

初心不可忘 ◇ 17

天満宮と天神さん ◇ 26

綾部へ ◇ 34

天眼通 ◇ 43

遷 枝 ◇ 53

松香館と玉水 ◇ 63

いざ、天国巡覧へ ◇ 73

元屋敷 ◇ 82

金明水 ◇ 91

みろく殿 ◇ 99

金竜海 ◇	108
塩釜おひねり ◇	
木の花庵 ◇	
天国に貯金 ◇	127
冠婚葬祭 ◇	
修行修了奉告 ◇	136
146	
156	117

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年から二十七年までの機関誌「おほもと」と、平成二十八年以降の「みろくのよ」に連載したもので、登場人物は実在の人物ではありません。

暁の大地

5

八、綾の聖地

出会いの地

「行つてらっしゃい」

みろく会館総合受付の水田春子が、大地たちに明るく声を掛けた。水田は大道場修行前日、大地の修行受け付けをしてくれた女性だった。修行期間中、大地の顔を見ると、気さくに声を掛けてくれ、大地も親しみを覚えていた。

「水田さん、いろいろお世話をになりました」

「氣を付けてね」

「はい、ありがとうございます」

大地たち修行者一同は、みろく会館ロビーに集合していた。大道場修行の亀岡での全日程が終わり、これから綾部へ向かうのだ。

大道場修行では、四日目、午前中の講座「現代の大本」を受講後、昼食を済ませ午後から、大本のもう一つの聖地である綾部市の“梅松苑”に移動する。つまり、靈国

に相応する亀岡の“天恩郷”での修行を終え、天国に相応する“梅松苑”で、修行の修了を神さまに奉告するのである。

「雨宮君、また来てね」

今回、大地たち修行者の担当をしてくれた坂口満も声を掛けってきた。

「はい、また参拝に来ます」

「明日、修行が終わつたら、おじいさんの所へ行くのかな?」

「はい、そのつもりです」

「じゃあ、一緒に歌祭と瑞生大祭に参拝できたらいいんじゃない…、数日後だからね」

「そうですね。それも明日、綾部の梅木家へ行つてから相談してみます」

「そうだね、待つてているよ」

「はい、ありがとうございます」

大地が頭を下げた。

「では、そろそろ行きましょうか」

徳島から修行に来ている北原剛が声を掛けた。昨夜の「歓^{えら}ぎの座」(座談会)終了後、

大地と丸山誠吉と馬淵光彦は、北原の乗用車に便乗することが、にわかに決まった。

その他の修行者は、JRで移動するため、亀岡駅まで坂口が運転するワゴン車で送つてもらえることになつていた。

「皆さんおそろいのようですから、そろそろ出発しましようか。では、JR組の方は、表の車にお乗りください」

坂口が案内した。

「では、私たちも…」

北原がワゴン車の後方に止めていた車に向かい、大地たちも続いて乗り込んだ。全員が車に乗ると、坂口がエンジンをかけた。

「お気を付けて！」

一列に並んだ水田と数人の道場講師、係員らに見送られ、大地たち一行は、真夏の天恩郷を後にした。

「すみませんねえ～、北原さん。よろしくお願ひします」

助手席に乗った馬淵がそう言つと、後部座席の丸山と大地も声をそろえた。

「よろしくお願ひします」

「はい、こちらこそ。楽しく綾部まで参りましょう」

ほどなく亀岡駅へ向かったワゴン車と別れ、大地らの車はそのまま直進し、国道九号線を西へ向かつた。

「丸山さん、今朝の『現代の大本』の講座の中で、教主さまがエルサレムでのエスペラントによる歌祭を願つておられるというお話がありましたけど、いつ頃あるんですか？」

大地が丸山に訊いた。

「それは私にも分からぬけれど、平成十七年（二〇〇五）の大本歌祭で、教主さまが『わが願ひエスペラントの歌まつり人類同胞ござりてエルサレムの野に』とお詠みになつたのだから、必ずいつかは開催されるはずだよ。本部としてもいろいろ努力しているそうだけど、なにせ中東の情勢が厳しくなつてゐるので、なかなか難しいんだろうね。私がイスラエルに行つた時には、合同礼拝もできただけど、その後から情勢が厳しくなつたよね……」

「えつ、丸山さんはイスラエルに行かれたことがあるんですか？」

「あるよ。二〇〇〇年の七月だつたけど、イスラエルのテルアビブ市で開催された世界エスペラント大会に参加した時に、『エルサレム平和使節団』が結成されて、百三人の団員の一人として参加したんだよ」

丸山が懐かしそうに言つた。

「そんな大勢で行かれたんですか」

「なかなか楽しい旅だつたよ。ハイファ市という所のティコティン日本美術館で“日本夕べ”を開催したり、世界大会の前には、エルサレムのオリーブ山・橄欖山かんらんざんの上にある大学の大講堂で行われた“世界平和祈願祭”に参拝させてもらつたんだよ。斎場は祭壇の向うがガラス張りで、エルサレム旧市街が一望できる最高の場所だった。祭典では、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の代表者がそろつて玉串捧奠されたし、あの時は感激したな！」

「そんなすごいことがあつたんですか」

「いや、いい経験をさせてもらつたなあ、懐かしいよ。これから行く綾部市とエルサレム市とは、二〇〇〇年の二月に友好都市宣言をしているんで、私もぜひエルサレムでの歌祭には、参拝したいもんだね。もつとも体力が許せばだけどね（笑）」

「丸山さんはまだお若いから、大丈夫ですよ」

「そう願いたいね。その時は、雨宮君も一緒に行かないかい？」

「そうですね、なかなか行ける所じゃないので、状況が許せば、参加したいですね」

大地が答えた。

「そうそう、そのイスラエルへ入るためにエジプトを経由して、そこで時間があつたから、ピラミッドを見学したんだけど、あれはスゴイね。ピラミッドは私が想像していた以上に巨大で、よくあれだけのものを作ったもんだと、心底ビックリしたよ」「あのクフ王のギザのピラミッドですか？」

「そうそう、一つ一つの石が予想以上にデカイ！　あれは一見の価値ありだね」「そうなんですね。見てみたくなったなあ」

車は亀岡市千代川町のＪＲ嵯峨野線を越える高架を過ぎ、桂川（大井川）と嵯峨野線の間を併走するように走る国道九号線を進んでいた。左手には田んぼや畑が広がり、その向こうには、小高い山が連なっている。

「そろそろ八木だね」

左隣に座っている丸山が言つた。

「もう少しすると右側に川堰がきが見えてくると思うけど、その辺りが開祖さまの三女のひささんと若き聖師さま・上田喜三郎青年が初めて出会つた場所なんだよ」

「あの『大本の出現』の講座であった、ひささんが茶店を開いていた所ですか」「そう、雨宮君よく覚えているね。私は先輩から、右手に堰^{せき}が見えたら、反対の左手に川の支流が流れしていく、おそらくその近くに茶店を開いておられたんじやないか」と聞いているんだけどね。

ほら、右前に大きな堰^{せき}が見えてきただろう、そして左を見ると…」

「あつ、あれですか」

助手席の馬淵が外を見ながら言つた。

「そう、あの辺りに、ひささんと喜三郎青年が出会つた茶店があつたそうだよ」

丸山が説明する間に、景色は変わり、車は八木町内に入つた。

過去の『人類愛善新聞』紙上に、「八木・虎天堰^{とらてんいね}」というコラムがある。丸山は、車中でその内容を分かりやすく説明した。

明治三十一年旧六月王仁師は、穴太の北^{二里南}桑田^{みなみくわだ}、船井郡の境界、大井川の清流をひいた虎天堰^{とらてんいね}の小さな茶店で、大本開祖の「筆先」に出合う。「このことわける者、東から出てくる」筆先を信じ、開祖の三女福島夫妻はこの道端に茶店を出し、師

の出現をまつた。

いづ
嚴魂大本ひらきみづみたま

人類愛善の道をひらけり

八木は二大教祖の最初の出会いの地である。三カ月後、師は綾部行きを決意された。八木町の東北の丘陵からは船井・南桑の大穀倉地帯が一望。南に虎がゆつたりと寝た姿の、虎山を拝す。その形はいかにものどかで、ユーモラスだ。この虎の頭のところに大井川の清流がぶちあたる虎天堰とらてんいねがある。この水口は南桑平野をうるおす生命線で、井関は船井の米・木材が集結され、水運をもつて京と直結する、交通の要路であつた。茶店はそこにあつた。

(『人類愛善新聞』昭和五十七年九月号から)

開祖さまと聖師さまがお出会いになるきっかけとなつた場所。そう思ふと感慨深いものがあるなあ……と同乗している三人ともが、心の内に感じていた。

「八木に関しては、そのほかにもエピソードがあるんだよ」「まだあるんですか？」

「その一つは、開祖さまがいかに神さまのご命令に無条件に従われたか、という逸話なんだけど」

「それはぜひ伺いたいですね」

馬淵が言つた。

「ある時、開祖さまに帰神された良の金神が『直よ、^{うじよ}外国へ行つてくれ』とおっしゃつた。すると開祖さまは素直にそのお言葉に従われ、五円のお金と一人のお供を連れて、綾部を出立されたんだそうだ」

「えつ、ただ外国というだけですか？」

大地が驚いた声で言つた。

「そうなんだ。外国がどこにあるのかも分からぬのに、開祖さまは神命のまにまに東に向かつて進まれた」

「もちろん、徒步ですよね」

馬淵が言葉を継いだ。

「そうです、歩いてですよ。で、この八木まで来られたら、突然神さまが『もうよい、帰れ』と…」

「えく、綾部からここまで歩いてきて、もう帰れ…ですか？ 殺生ですねえ」

「神さまは何かの“型”をさせられたんだろうね。『ここは外国と神国との境、神界の立てわけ場所じや』との神示が降りたということなんだね」

「……？」

大地は不思議そうな表情で首をひねった。

「ほら、八木という漢字は、八木の“八”を逆さまにして“木”にくつづけると“米”になるだろ。米に国をつけると…」

「米国……あつ、アメリカかあ！」

「で、開祖さまはそのまま綾部に帰られた…、というお話でした

「ん、なかなかできないことですね」

ハンドルを握っていた北原もうなつた。

初心不可忘

八木の町中を過ぎ、車中では昨夜の「歓^{えら}ぎの座」の話題になつた。

「歓^{えら}ぎの座」とは一般的に聞き慣れない言葉かもしれない。講師を囲み、修行者それが大道場修行を受講するようになつたきつかけや修行の感想、信徒であれば入信の経緯や信仰体験談など、思い思いに語り合う、いわゆる座談会である。

一方的に講座を聞くだけでなく、同じ修行者の心の中に耳を傾けることにより、時にはそれが“気付き”や“学び”につながることもある。あるいは、講座の中で疑問に思ったことや理解できなかつたことをあらためて講師に問い合わせ、講座の内容をより深めることもできる。

大地自身もその場で、修行に來た経緯や三日間の感想を語つたが、大地には一人の女性の話が印象に残つた。

「あの宮崎から来られている梯^{かげはし}さんは、とっても良いお話をされていましたね」

「そうそう、印象的だつたなあ」

助手席の馬淵も振り返りながら相槌^{あいづち}を打つた。

「信者さんじやないけど、なんだか、とっても素直な女性でしたね」「また“かけはし”という名字もいいよね。梯洋子さんでしたね」

運転しながら北原が言つた。

「おいくつくらいでしようかね?」

「四十二歳つて聞いたけどね」

「さすが丸山さん、しつかり情報キヤツチしていますね」

「はい、任せなさい」

また丸山のトーケンの流れになり、しばらく梯の話題で盛り上がつた。

昨夜の「歎ぎの座」の講師は、修行前夜の「修行の心得」担当だった竹田伝生つたおだつた。神教殿の講座室で、机を円形に並べ、午後七時から九十分間、竹田が進行役になつて、順に話を引き出していった。分割受講の修行者もあり、大地たちのような全日程の受講者と合わせ十人ほどだったので、一人の持ち時間は十分もなかつた。丸山が相変わらずちよつとしやべり過ぎの感があつたが、おのずとムードメーカーの役目を果たしてていたので、終始和やかな中での座談会となつた。

大地たちが印象的だったという梯は、インターネットで大本のことを知つて興味を

持ち、「自分探し」のために大道場修行を受講したことだった。

「とても思い悩むことがあり、何か一つでも“気付き”をいただけたらと、正直、する思いを持ちながら亀岡にきました。初めてのところで、少なからず不安な気持ちもあつたのですが、不思議なことにすぐに溶け込むことができました。

そのきっかけは、二日目の講座前の鎮魂でした。以前お寺で座禅を体験したことがあつたのですが、鎮魂の姿勢は初めてでした。ところが、八雲琴の音色を聞いているうちに、自然と涙があふれてきたんです。自分でも、どうしてそうなったのか分かりませんでした。もちろん悲しくて涙が出てきたわけではなく、自然と胸がいっぱいになります：私の魂が喜んでいるのかも…と、自分を客観的に見てているもう一人の自分がいるような、そんな気分でした。

また、万祥殿での朝夕拝で、ピンと張り詰めた神聖な空氣の中で、皆さんと奏上する祝詞には心が洗われるようで、とにかく気持ち良くて、不謹慎かもしませんが、『何だ、この快感は』と思つたほどです。

とにかくこの三日間は全てが新鮮で、想像していた以上というか、予想を超えた充実した清らかな気持ちになることができたと思っています。講師の先生方や係の方々、それから皆さんにとても親切にしていただきて、ありがとうございました』

梯は、大地たち修行者の顔を見回しながらお礼を言つた。

「それは良かったですね。ところで講座の内容はいかがでしたか？」

竹田が質問した。

「お話の中では初めて聞く専門的な言葉もありましたが、講座は全てが私の心にすんなり入ってきたように思います。もちろん、内容を全て理解できたとは思っていませんが、何と言うのでしょうか、納得できたというか、抵抗なく心に響いてきました：という感じでした。大本の教えは、とても幅が広く、深いですね」

「そうですね」

「梯さんは、朝拜前の万祥殿のお掃除を、とっても積極的にされているように感じましたよ」

丸山が感心したような表情で言つた。

「積極的だつたかもしれません。自分でも不思議だつたんですが、普段は自宅でも仕方なく掃除をしていました。掃除をした方がいいかな…とか、しなくちゃいけないなあ…とか、いつもそんな気持ちで掃除をしていました。ところが万祥殿では、生まれて初めて“掃除がしたい”と思つたんです。

万祥殿のようなどても神聖な場所をお掃除させていただいてるんだと思うと、ア
ン、神さまはこんな私に、このような素晴らしい聖域に入ることをお許しくださつた
んだ。ありがたい!』と素直に思えました。すると鳥肌が立つようで目頭が熱くなり
ました』

「梯さんは、聖地での出来事全てを、とても信仰的に感じておられる。きっと求める
心がそうさせているのでしようね』

竹田は梯の思いを噛みしめるように、頷いた。

車はJR吉富駅前にさしかかっていた。

「丸山さん、あの梯さんの掃除に対する思いというのは、びっくりしました。というか、
自分の掃除に対する心構えが恥ずかしく思えたんですけど…』

大地が昨夜の梯の言葉を思い出しながら、横の座席の丸山に話し掛けた。

「まったくその通りだね。この私でも、初修行の時には、梯さんと同じ気持ちが、若
干はあつたなあ…、ということを思い出したほど、初心をすっかり忘れてしまつていた。
『初心不可忘』、まさに初心忘るべからずでないといけないね』

「なかなか難しいことですけど、初心に帰ることは大切なことですね。私も梯さんの

掃除に対する思いを聞いて反省させられました

馬淵が振り返りながら言つた。

「余談だけどね」

「そう言つて丸山は話を替えた。

「初心忘るべからず、というのは、能を大成した世阿弥の言葉で、一般的には“はじめの気持ち、志を忘れてはならない”という意味で使われるよね」

「そうですね」

大地が相槌あいづちを打つた。

「実はね、初心忘るべからずには、もう少し深い意味があるんだよ」

「えつ、どういうことですか？」

「世阿弥がこの言葉を残した『花鏡』かきょう」という伝書には、“初心忘るべからず”は三才条あるんだ。それは、

是非の初心忘るべからず
時々の初心忘るべからず
老後の初心忘るべからず
とあるんだね」

「三つもあるんですか？」

「そう、もともとは能役者が芸を極めるために必要なことを表した言葉の一つだということで、世阿弥は、能役者としての精進の段階で、いくつもの初心があると説いているんだね。」

若い時の初心、人生の時々の初心、そして老いてからの初心とあるんだ。しかもその初心は、”はじめの気持ち、志”、つまり初志ではなくて、初心者の頃の未熟さやみつともなさ、とも言えるんだ。つまりは芸の未熟さ、みつともなさを折に触れて思い出すことによって、”あの状態には戻りたくない”と反省することでさらに精進できるというんだね』

「なるほど」

「だけど、ついついそれが観念的になつて、後悔先に立たずを繰り返しちゃうんだね……、私のように。」

三代教主さまはご自身で『わたしもこれ（初心不可忘）を座右の銘にしています』とお書きになつていて、三つの不可忘の戒めは能樂に限らず、宗教にも芸術にも、処世にも、全ての道に大切な心構えであつて、大本人も信仰者としてこの戒めを常に呼び起こして、身魂磨きをするようにとおっしゃっている。そして、お筆先の『ぬきみ

の中にいるような心でいてくださいよ』 というのは、初心不可忘のことだ…ともお示しになつてゐるね』

「何だか深いお話をですね」

「今の私はまさに、老後の初心忘るべからず、つてとこだね』

「なるほど、じゃあ私は、是非とも初心忘るべからずですね』

「そうそう、そういうこと（笑）』

丸山が高笑いした。

車が園部の町中に入つてすぐ、丸山が左手の方に顔を向けた。

「この左手の方に、『^{いきみ}天満宮』 という大本とご縁のある天神さんがあるんだよ』

大地は、記憶の中にその名称を探した。

：確か。

「菅原道真が亡くなる前から、そこでお祀りされていたということで、日本で一番歴史の古い天満宮ですよね』

大地が言つた。

「おや、よく知つてゐるね。行つたことがあるの？」

「いえ、以前祖父に話を聞いたことがあって…。生きているうちから祀まつられたつてい
うのが、妙に印象的だつたので憶えていただけです。それがここにあるんですね」

「雨宮君、たいしたものだね。じゃあ、南陽寺のことも知つてゐるかな？」

「南陽寺？ いえ、それは知りません」

「そうか。近くに南陽寺という曹洞宗のお寺があつてね。そこも大本とご縁があるん
だよ。聖師さまは青年時代、園部で獸医学や牧畜の勉強をされていてね。その南陽寺
に住んでいた国学者の岡田惟平翁これひらに師事されていたそうだよ。そこで岡田翁から、鎌
倉時代に途絶えてしまつた歌祭の由来や方法、歌垣の作り方などを学ばれたというこ
とだ」

「それは、明治中頃の話ですよね」

馬淵が訊きいた。

「そうですね、聖師さまが二十代前半の時です。聖師さまはそのことを長い間温めて
おられ、昭和十年に『大本歌祭』として、亀岡で復興させられ、第二次大本事件で中
断の後、昭和二十五年から、二代教主さまによつて再び復活されたわけですよ」

「なるほど、そういう歴史がこの園部にあつたのですね。面白いな〜」

丸山の説明に、大地は歴史の流れを感じていた。

天満宮と天神さん

「丸山さんは歴史に詳しいんですね」

ハンドルを握る北原が言つた。

「ホント、勉強になりますね。ほかにもまだタメになる話、ありますか?」

助手席の馬淵が訊ねた。

「皆さん、よく注意して聞いてくださいよ。私の話は、けつこう出任せかもしけませ

んからね」(笑)

「えつ、でたらめってことですか?」

大地が驚いた。

「雨宮君、でたらめとは言つていませんよ。で・ま・か・せ、です」

「出任せつて、でたらめといふことじやないんですか?」

「ちよつと違うかな。私の場合は、口から自然と、出るに任せる…ということですから、神さまのご内流のまにまにお話ししているということです」

「お、なるほど」

「いやいや、これはでたらめかも (笑)」

「えへ、どっちなんですか」

大地が反応すると、車内は笑いに包まれた。

「ごめん、ごめん…。じゃあ、おわびに雑学を一つ…」

「よつ、待つてました」

運転している北原がハンドルをたたいた。

「では…」

丸山は一つ咳払いをして話を始めた。

「さつき、園部の“生身天満宮”の話が出ましたね。菅原道真が亡くなる前から、道真公をお祀りしていた日本で一番歴史の古い天満宮だ…ということを雨宮君が知つていましたね」

丸山が確認した。

「はい、祖父に聞いた話で、生きているうちから祀まつられていたということで…」

「そうだね。ということは、神社の創建は道真公が亡くなる少し前ということになる。

確か…、亡くなる二年前だつたと思うけどね」

「そうなんですね」

「どころがね、全国には他にも天満宮と呼ばれる神社の中に、創建がそれより古いところもあるらしいよ」

「えつ、じやあ、^{いきみ}生身天満宮が一番古い天神さんじやないということですか？　おじいちゃんがでたらめだつたとは…」

大地は首をかしげた。

「いやいや、そうじやなくて、雨宮君のおじいちゃんは正しいよ」

「どういうことですか？　丸山さんがでたらめ？」

「いや、正確に言うと、^{いきみ}生身天満宮は、日本最古の天満宮ではなくて、道真公を祀つた最初の神社として最古の天満宮ということ」

「つまり、もともとあつた天満宮に、道真公が亡くなつて以降、^{ごうし}合祀した神社もあるということですか」

馬淵が確認した。

「そういうことですね。で、さつき雨宮君が^{いきみ}生身天満宮のことを天神さんと言つたけど、天満宮のご祭神…つまり道真公のことを天神さんと呼んだことから、天満宮のことを、親しみを込めて天神さんと呼ぶようになつたようだね。実際には、『天満大自在天神』

という名前とか、いくつものご神名があるようだよ。だから今では、一般的に天満宮と天神は同じだと思われているみたいですね」

「本来は違う神社だったということですか？」

「いろいろな説があるかと思いますが、道真公が祀^{まつ}られる前から天神社というのはあつたんですね。古くは奈良時代創建の社もあるらしいんですよ。

それから、「天神地祇^{てんしんぢぎ}」という言葉があるように、もともと天神というのは、地祇^{ぢぎ}、地の神に対して天神、天の神ですね。つまり地祇^{ぢぎ}が国津神で天神が天津神のこと…。『天津祝詞』の天津神、国津神、八百万の神たちとともに…の天津神ですね』

「丸山さん、話の腰を折るようですが、天津神と国津神というのは、どう違うんですか？」

大地が訊^{たず}ねた。

「そうだなあ、大道場修行中の雨宮君なら、こんな回答はどうかな。もちろんどちらも神さまだから目には見えないけど、お働きの立場や場所が違う。天津神は主に靈界でご活動の神さま方、国津神は主に現界でお働きの神さま方、つてとこかな」「あ、なるほど、何となくイメージできました。ありがとうございます。で、天神

社のことですね」

大地が話を戻した。

「例えば京都にある北野天満宮は、全国に約一万二千社ある天満宮の総本社で、”北野の天神さん”と親しまれている神社でしょ。以前は北野神社とか天満天神と呼ばれていて、天満は”あまみつ”とか”そらみつ”と読んで、雨がみつる：雨がたくさん降るようにと願う雨乞いの神さま、つまりは雷の神さまということなんですね」

「面白いですね」

馬淵が興味深げに相槌を打つ。あいづち

「実はこの話、京都大学の名誉教授だった上田正昭先生が、昔『おほもと』誌の座談会の中で話しておられたことなんだけど、すごく興味深かつたんで憶えていたんですよ。歴史学の権威者の説だからたぶんそうなのでしょう。だからこの話は出任せでなくて、受け売りです（笑）」

「それなら間違いないでしようね」

馬淵が笑顔で頷いた。うなずいた

「ちなみに、その北野天満宮には、明治三十三年の鞍馬山の出修の神事の時に、開祖さま、聖師さま、二代さまが参拝されているんですよ。そして開祖さまはその時に、道真公の不遇の晩年に触れられて、國祖・良の金神さまのご隠退のことを、涙をハラハラと落としながら語られた…ということなんです」

開祖さまの話題となり、丸山は急に真面目な顔になつた。大地は、鞍馬山の出修と聞いて、確かに講座の中で聞いたような気がしたが、思い出せぬ丸山に訊ねた。

「雨宮君、そりやあそудよ。初日の『大本の出現』の講座の最後に、時間切れで項

目だけ読んで終わりだつたからね」

「なんだそうでしたか、憶えてないはずですよね。よかつた」

「あつ、居眠りして聞いてなかつたのかも」

「いえ、そんなことは…」

大地は顔の前で手を振つた。

「ついでだから、天神さんについてもう一つ。京都の金閣寺の手前に”わら天神前”というバス停があるんだけど、それは近くに”わら天神宮”という神社があるからなんだね。正式名称は”敷地神社”というけど、京都では有名な安産の神さまで、妊娠

さんにお下げする安産のお守りの藁から、『わら天神宮』って呼ばれていてね。

でも天神だけど、主祭神は菅原道真ではなくて、木花開耶姫命さまなんですよ。

神社の起源が道真公の時代よりずいぶん前だから、主祭神は当然違うわけですよね

「なるほど、天満宮と天神さんは必ずしも同じでないということの実例ですね」

「そういうことですね。でも、神社の起源や由緒というのは、古文書等ではつきり分かることは別として、時代の流れで増えたり、人間の都合で変化した場合もあるようだからね。

道真公だつて、祟り神として恐れられ、怒りを鎮めるために祀まつられたのが、そもそも始まりだつたわけでしょ。それが時の流れの中で、道真公の優秀な能力にあやかりたいとして、民衆から学問の神さまとして崇められるようになつたわけですよ

「ずいぶんな変わりようですね」

大地うねが頷いた。

「道真公は千年の間に待遇が逆転したけど、国祖の神さまは、三千年以上も悪神、神としてお隠れになり、世を忍んでこられたんですから、大変なことです」

「そうですよね。その三千年も、人の歴史の三千年とは違いますからね」

祟たた

馬淵が小さな声で言つた。

「さつき話した開祖さまの北野天満宮ご参拝の折の話…、開祖さまは国祖のご境遇やご艱難を偲ばれて、その思いを語られたんでしようなあ。われわれのような凡人では及びもつかないようなご苦労をなさつてゐる神さまのことを、開祖さまはわが身のように、いやそれ以上に痛切に感じておられたんでしよう」

しみじみと語る丸山は、さつきまでのひょうきんな表情と変わつていて、大地は丸

山の信仰心の一端に触れたような気がしてゐた。

綾部へ

車は観音峠を越え、京丹波町に入つた。頭上を横切る京都縦貫道の高架下を過ぎると、しばらく道路が片側二車線と広くなつている。

丸山の雜学によると、以前このあたりは渋滞することが多かつたようだ。特に五月のゴールデンウイークや夏の海水浴シーズンには、丹後方面でのレジャー帰りの車で、京都方面へ向かう上り線がよく混んでいたとのこと。だが近年は国道の一部拡幅と縦貫道の整備で、渋滞することはほとんどなくなつた。大地たちの車も綾部へ向かつて、順調に走行している。

国道九号線は、片側二車線が終わるところで分岐していく、分岐点である京丹波町の「蒲生」こも交差点から右折して北に進路をとると国道二七号線となる。正確に言うと、そこが二七号の終点で、始点は福井県敦賀市つるがである。

ちなみに大地たちが走っている国道九号線は、京都市下京区の「烏丸五条」交差点を起点に、山陰地方を経由して、終点の山口県下関市まで続く実延長六一二、四キロメートルの長距離だ。国道四号、国道一号に統いて日本で三番目に長く、西日本では一

番長い一般国道である。

大地たちはそのまま国道九号線を直進した。聞くどどちらの道を進んでも綾部には着くようだが、直進し途中で国道一七三号線に入るルートの方が、二七号線を選ぶより五分ほど早いらしい。

「私が若い頃は、綾部へのルートは二七号線だけだつたんですよ。でも、この先の一七三号線が綾部まで開通してからは、この道を通ることが多くなりました。でもね、二七号線を走る方が、景色はきれいなんだよね。特に五月のみろく大祭のころは、山々の新緑が本当に美しくて、私は個人的にはそちらの道の方が好きでね‥。二七号線から見る遠くの山並みの新緑は、まるで聖師さまの耀盤（ようわん）を見て いるようなんだなあ‥。まあ、今は真夏だから、どちらの道もそう変わらないけどね」

「へえ、そうなんですね。今度ぜひ見てみたいですね」

丸山の説明に大地が応えた。

国道九号線を直進した車は、そろそろ国道一七三号線との交差点近くまで進んでき
た。

「そうそう、この辺りまで来ると、また一つ思い出す話があつてね……」

「丸山が左手の窓外に目を向けながら言つた。

「どんな話ですか？」

大地が訊ねた。
大地が訊ねた。たずねた

「その昔、この辺りであつた聖師さまのすごいエピソードだよ」

「えへ、どんなすごいことですか？」

「それはね……」

丸山は一呼吸置いてから話し始めた。

「この辺り一帯は昔、ひのきやま松山と呼んでいて、今はもうなくなつたけど、樽屋たるやという旅館があつてね。聖師さまはその旅館をよく使つておられたそうなんです」

「こんなところに旅館があつたんですね」

「今走つている国道九号線は、山陰道と呼ばれる街道で、ところどころに宿があつたんでしょうね」

「なるほど、宿場のような場所があつたんですね」

「さつき八木の虎天堰とらてんいねで、聖師さまと開祖さまの次女・福島ひささんが出会つて、聖

師さま：上田喜三郎青年が、初めて綾部の開祖さまを訪ねられた話をしたでしょ」

「はい、確か高熊山での修行をされたあとでしたね」

「明治三十一年の旧八月に、聖師さまは初めて綾部へ行き、開祖さまとご対面されたわけですね。」

聖師さまは神さまから『一日も早く西北として行け、お前の来るのを待つている人がある』と命じられて、八木でひささんに会い、綾部へ行かれた。一方開祖さまはお筆先を通じて神さまから『なおの力になる人をこしらえてあつて、そのお方をひきよせるから、何事でもたずねなさい』ということを聞かされていた。

つまりお二人は互いが“運命の人”であったわけです。でも最初はすんなりといかなかっただ

「どうしたことですか？」

「開祖さまが聖師さまに、『お前さんは何神さんでございますか？』と聞かれると聖師さまは当時、駿河の稻荷講社というところに属しておられたので、そのことを伝えられると、開祖さまは『この神さまはそんなところに世話にはなれない』とおっしゃつたということなんですね。開祖さまのそばにいた役員が、怪しいやつが来たと反発し

たこともあって、この時、聖師さまはわずか一泊して綾部を去られたんです」「では会談は物別れに終わつた、ということですか？」

「残つてゐる記述から、そんなふうに取られることもあるようだけど、違うように受け取れるところもあつてね…」

丸山はそう言つて、以下の聖師さまの回顧歌集『霧の海』にあるお一人の初対面とお別れの場面を詠まれたお歌の概略を説明した。

三枚の半紙に筆先さらさらと

書きて開祖は吾にたまへり

汝こそ神のよさしの神柱と

しるしありたりかしこき筆先

今暫し時節ははやし時来れば

迎へに行かむと開祖は宣らせり

「だから聖師さまは、開祖さまのお心を理解して、しばしお別れになつた…とも取れるんですね」

「なるほど。で、聖師さまは、亀岡に帰られたわけですか？」

「いやそれが穴太の実家には帰らず、園部まで引き返されたんですね。おそらくそのことも開祖さまと別れられる時か、あるいは後日、所在を伝えておられたんでしよう。というのも、園部に滞在している聖師さまの元に、開祖さまの指示で、綾部の四方平蔵さんからの手紙が届いているんです。

何と言つても聖師さまが帰られてから、お筆先に何度も聖師さまのことが書かれるようになつたんです。開祖さまの力になるお方だとかね」

「そうなんですか。で、聖師さま…喜三郎青年は、園部で何をされていたんですか？」
助手席の馬淵が訊いた。

「知り合いの座敷を借りて、神さまのお道を宣伝させていたんです。だから聖師さまを信奉する人たちも増えていたようで、園部の町の有志は、信仰はともかくも地元の繁栄の一策として、園部の公園の中に布教所を建てて聖師さまを永住させようとしていたというんだね」

「そうすると、靈験あらたかだつたということですね」

大地が確認した。

「そうだね。ところがそこへ綾部から開祖さまのお使いとして、先に手紙を出してい

た四方平蔵さんが、聖師さまをお迎えに来たわけですよ」

「あらら、それなら園部の人たちのもくろみは外れてしまつたんですね」

「そうなるね。聖師さまは最初、『綾部はもうこりごりしましたから、行くのはやめますワ』と言われたようだけど、よくよく話を聞くと、開祖さまと平蔵さんが相談の上迎えに来たらしく、反対する役員にはナイショだつたというんだね。で、いろいろと話を聞かれて、聖師さまも覚悟を決め、綾部行きを承諾されたというわけです。

それでなんとその夜、聖師さまは往復八里というから三十二キロの道を穴太の実家まで帰られて、おばあさんやお母さんに綾部へ行くことを告げ、産土の神さまに祈願をし、明け方までに園部へ戻つてこられたということなんです」

「何という健脚…」

「今的人にはできないことだね」

「そうですね」

「そのことは平蔵さんも知らなかつたようで、二人はそのあとすぐに綾部へ向かつて出発されたわけです」

「なんと…」

「で、その日の夕刻に、さつき説明した桧山の樽屋旅館に投宿されたというわけですよ」

丸山の説明に大地は無言で頷いた。

「さあ、二人が樽屋たるやに入るとたちまちに大雨が降りだした。雷鳴轟きとどろき、ものすごい豪雨になつた。そんな中、一人は夜中まで話し込み、午前四時頃に起床されたようだけど、相変わらずバケツをひっくり返したような大雨が降り続いていたんだね。で、平蔵さんが心配して雨が止むやだろうかと聖師たかしさまに訊ねると、聖師さまは『午前九時になればカラリと晴れます』と断言されたんですね」

「その時代、天気予報もないわけですね」

「まだ夜も明けていない時だし、まさに大予言をされたわけです」

「へえ」

「それから聖師さまは、平蔵さんに不思議なことを言われるんですよ。一度も行つたことのない平蔵さんの家の周りの様子を言い当てられたんです。家の裏にきれいな水が湧くため池がある。前には枝ぶりのおもしろい松の木がある。近くには街道沿いに小さい店があつて六十歳くらいのおばあさんがいるなどとすべてピタリと当てられたものだから、平蔵さんはもうビックリ！」

「僕もビックリです！」

「でも平蔵さんはそれが稻荷使いじやないかと心配するんですね」

「稻荷使い？」

「まあ、狐や狸のような低級な靈を使って、超人的なことを予言したり当てたりすること…とでもいうのかな。だからそんな芸当を綾部でやつてしまふと、開祖さまのまわりにいる役員らがまた大騒ぎすると心配したわけです。それで聖師さまに、綾部へ行つたらそんな魔法だけは使わないようにしてください、と頼まれるんです。

すると聖師さまが、そんな分からず屋ばかりなら綾部には行かない、と言いだされるものだから、平蔵さんはあわてちやうんですね。今の時期は、綾部・和知川の鮎があゆおいしいだの、開祖さまのご内命で来ているので困るだと、聖師さまを説き伏せられるんです」

「ここまで来て帰られたのでは、平蔵さんも開祖さまに合わす顔がない…ということになりますね」

「そう。で、聖師さまは狐使いや魔法じやなくて、これは天眼通てんがんつう…といふものだから、それをあなたに授けましょ…ということになつたわけです」

「おもしろそう！」

天眼通

大地は興味津々である。

：が、ちょっと待てよ、というような表情で、隣の丸山の顔をのぞき込んだ。

「あの？」

「ん？」

「テンガンツウ：とか言われましたが、それはいつたいどんなものなんですか？ 今伺つた聖師さまと四方平蔵さんとのエピソードから、何となく分かるような気もするんですけど…」

「そうだよね、今の若い人たちには聞き慣れない言葉だよね」

「はい」

大地は頷きながら話を続けた。

「大道場の講座の中でも、大本独特の言葉があつたりしますよね。あれって僕も初めて聞いた時には分かりませんでした。講師の先生が、その言葉の解説をしてくださると理解できましたが、講座の中でサラッと使われる…えつ、今のどういう意味？…

つて感じで、頭をひねつてしましました」

「そうだね。宗教用語…特に仏教用語だつたり、大本独特の言葉だつたりするからね」「大本はどちらかというと神道ですよね。^{しんとう}なのに、どうして仏教の言葉が多いんですか？」

「仏教用語はお筆先の中にもいろいろあるけど、神さまはできるだけその時代の人々が理解しやすい言葉、あるいは時代を超えて親しまれている言葉を使われたんじやないかなあ。そうしないと、雨宮君と同じように、みんながまったく知らない言葉だったら誰も理解できないからね。」

『靈界物語』の中にも時々 „神代^{かみよ}言葉“ が出てくるけど、それだけ読んでもチンパンカンパン。まあ、聖師さまが解説されているから分かるけど、そうでなければ、現代人にはまったく意味不明だからね」

「そんな言葉があるんですね」

「だから神さまは、少しでも靈界や神さまのことが人民に伝わるように、一般的に分かりやすい言葉を使われたんだと思うわけ。…って、私も先輩に教えてもらつたんだけどね。受け売り、受け売り…（笑）」

丸山が笑顔で答えた。

「なるほど、そうなんですね」

「大本では、理想世界、地上天国のことを“みろくの世”と呼んでいるけど、仏教でい
うみろくの世はちょっと違うんですよね」

助手席の馬淵が言つた。

「そう、馬淵さんはよく分かつてゐるんじゃないの」

「あつ、いや、そんなに詳しくはないんですけど…。仏教のミロクの世は、昔、世上で盛
んだつたミロク信仰に由来してますよね」

「はい。馬淵さん、続けて…」

丸山が馬淵に話を続けるように促した。

「丸山さん、間違つていたら訂正してくださいね」

「いやいや、自信をもつてどうぞ」

丸山は馬淵を促し、馬淵もまんざらではない表情で語りだした。

「日本でのミロク信仰は長い歴史があるようで、仏教が日本に入ってきた五世紀の後
半から、すでに始まっていたらしいですね。」

簡単に言うと、お釈迦さんが入滅後：つまり亡くなつてから五十六億七千万年のうちの世に、弥勒菩薩がこの世に下生して世の人々を救うという、一種の救世主信仰ですね。

高野山を開いた空海も、自分は死してのち、弥勒菩薩の淨土である兜卒天に生まれて衆生を見守り、釈迦入滅から五十六億七千万年後に、弥勒菩薩と共に下生して衆生を救うんだと誓願していたそうです。

世の人々は、お釈迦さんが入滅してから弥勒出現までの間、仏のいない世界になることを恐れて、現世を救うさまざまな仏さまを考えてきたということのようです。ですから、空海：弘法大師は亡くなつたのではなく、今の高野山の“奥の院”で生き続けていると信じられているんですね

「だから、弘法大師を慕う人々がこぞつて奥の院にお墓を建てたんですね」

「そうなんです。一度高野山の奥の院に参拝したことがあるんですけど、もうびっくりしました。一番奥の弘法大師の御廟までの広大な場所に、二キロメートルの道がつて、その両側に、なんと二十万基を超えるお墓があるんです」

「え？ 二十万！ そんなにあるんですか？」

大地が驚いた。

「お墓といつても、遺骨を納めたものだけではなく、祈念碑や慰靈塔なんかもたくさんあるんですよ。昔の諸大名の墓石もあれば、現代の大手企業関係者のユニークな慰靈碑なんかもあって、ちょっと別世界でしたね」

「いつだつたかNHKの“ブラタモリ”で紹介していましたね。確か戦国時代のライバルだつた上杉謙信と武田信玄の靈廟れいびょうというか供養塔も近くにあるとか…。おつ、また何だか話がそれちゃつたかな」

「すみません」

馬淵が小さく頭を下げ、話を戻した。

「仏教用語のことでしたね」

「はい」

大地が返答した。

「そうそう、『おほもとしんゆ』に“へんじようなんし変性男子”というのがあるけど、これも仏教用語ですよね、丸山さん」

馬淵が丸山に訊いた。

「はい、大本では“へんじようなんし変性男子”は開祖さまのことで、肉体は女性だけど身魂みたまは男性…」

丸山が補足した。

「でも仏教用語には、その反対の『^{変性女子}』という言葉はないらしいんですが、『おぼもとしんゆ』には出でますね」

「大本では、^{変性女子}は聖師さまのことだと、講座で教わりましたが…」

大地が言つた。

「その通り。でも仏教用語では、^{変性男子}だけ。これは古来、女性は成仏することがとても難しいとされて、いつたん男性になること、つまり性を男子に変えることで成仏することができるようになるとした、一種差別的な思想からきている言葉のようですね」

「へえ、そういうことなんですか。じゃあ、大本で使つてている意味とはずいぶん違うということですね。知らなかつたな」

運転中の北原が感心したような声で言つた。

「すごいなあ、そういうことですか」

大地もしきりに頷いていた。

「丸山さん、『みろく』という言葉は一般に仏教用語として使われてきたわけですが、本当は違うそうですね」

馬淵が訊ねた。

「そうなんですね。実は聖師さまも、みろくの世という言葉を何とか神道風に代えられないかと思つておられたんです。そこで開祖さまにお伺いされ、開祖さまも同意されて神さまにお伺いされたそうです」

「それで…？」

「すると神さまは”ミロク”というのは神さまがお釈迦しゃかさまを通じて発せられた神の言葉である”とおっしゃったそうだよ。みろくとは”いよいよ革あらためる力、はたらきのこど”だとも聞いています。

：あれ、何の話からこうなつたかな？」

丸山が首をひねつた。

「すみません、天眼通てんがんつうの質問からです」

大地が答えた。

「はいはい、そうだつたね。え、天眼通てんがんつう”というのは、何でもできる靈妙な力：神通力の一つでね。これも菩薩ぼさつに備わる特殊な六つの能力：六神通”というのがあって、その一つ。ある物に対しても普通の人間が見ることができないことを、自在に見透かす特殊能力のことですなあ」

「ということは、透視能力ですね」

「ん~、ちょっと違うかもしれないけど、まあ、そういうことかな」

「なるほど。で、聖師さまはその力を持つておられたんですね」

「そういうこと。行つたこともない四方平蔵さんの家の様子を言い当てたエピソードが、まさに天眼通てんがんつう」しかも、聖師さまはその力を平蔵さんに授けられるんですね」

「でも、特別な人が持つ特殊能力なんですよ。普通の人が簡単に会得できるものなんですか?」

「アハハ、平蔵さんも今の雨宮君と同じことを聖師さまに訊たずねているね。『私のような素人でもそんな天眼通てんがんつう』ができますか?』ってね」

「やつぱり」

「すると聖師さまは平蔵さんに、『天眼通てんがんつうくらいは、すぐに分かるようになる』と言つておられる。ただし『真心になりさえすれば』という前提があつてのことだけね……。平蔵さんは素直な人だったんでしょう、聖師さまが言われるままに、座敷の真ん中に座つて、目を閉じて手を組んでみた。そして聖師さまが『それ見い!』と大声で言われた途端、目を閉じているのにもかかわらず、風景が浮かび上がってきたんですね」

「どんな風景だつたんですか？」

「きれいな水が湧く池の近くに、古くて小さな藁葺きの家があつて、裏には大きな力ヤの木なんかがあつて…と見えた風景を細かに話されたんです。すると聖師さまは、それは自分が生まれた家だ、とおっしゃつたんですね。つまり聖師さまは、ご自分のご生家を平蔵さんに見せられたわけです」

「へえ、そんなこともできるんですか。てんがん天眼通わらぶ、恐るべしですね」

「だから、てんがん天眼通を授けられた平蔵さんは大喜びですよ」

「そりやあ自分が特殊能力を身につけられたんですから、嬉しいですね」

「いやいや、そういうことじやなくてね」

「えつ？」

「平蔵さんは、“開祖さまは偉いもんだ”、と喜んだんですよ。というのも開祖さまが、大勢の役員や信者に隠れて、喜三郎青年をお迎えしてこいとおっしゃつただけの価値がある：だから、この青年だつたら神さまのご用が十分に務まるだろうと確信できたから、とっても喜んだということですよ」

「なるほど、平蔵さんってよっぽど素直な人だつたんですね」

大地が笑顔で言つた。

「そうかもね。で、その後、二人は朝食をすませて準備をし、いざ綾部へ向けて出立となつたんです」

「あつ、ひよつとしてその時間が、予言された午前九時ということですか」

大地が丸山の顔を見た。

「その通り！ それまで降っていた大雨がウソのようにピタリと止^やみ、日本晴れの空が広がり、太陽が^{さんさん}燐々と輝きだした。平蔵さんにとっては不思議なことの連続で、もうすっかり聖師さまにまいつてしまつたわけですよ」

「まさに予言通り、すごいエピソードですね」

大地は感心しながら何度も頷いた。

遷 枢

車は国道九号線と一七三号線が交わる交差点を右折して綾部へ向かって走る。

一七三号線は大阪の池田市を起点にして、梅松苑からほど近い綾部市の新綾部大橋を渡つた二七号線との交差点まで続く国道である。

車の左手には田園が広がり、その向こうには小高い山が連なつてゐる。それらに添うようにして、橋脚の上に京都縦貫道が走つてゐる。

「さつきも話したけど、この国道は何年前だつたか、ずいぶんあとになつて綾部まで延長されたんです。大本信徒にとつては便利な道で、まあ、綾部への参拝道みたいなもんですね（あ）。ただ、山の中を抜ける道なので、起伏もカーブも多いけどね」

丸山が山手に視線を向けながら言つた。

「昔は綾部までの旧道が、あの山の裾野辺りにあつたようです。今はこうして車で楽に移動できるけど、大本の草創期、聖師さま方はその道を歩いておられたんですね」「亀岡から綾部まで歩くとなると、相当時間がかかるでしようね」

大地が訊いた。

「数年前に、本部の若い人たちが歩いたことがあつたんだけど、確か一五、六時間かか

つたんじやなかつたかな。もつとも昔の人は健脚だつたから、もう少し早かつたかも
しれないけどね』

「それにしても大変ですね。僕には無理だなー」

窓外を眺めながら、大地がつぶやいた。

「そうそう、聖師さまがご昇天になつたあと、柩^{ひつぎ}が亀岡から綾部まで遷^{うつ}されたんですね。大勢の信徒がお供して、その旧道を手で引いて歩いたんです」

「えつ、徒步で?」

「そう。なんでも最初は列車でお運びしようと交渉したらしいんだけどかなわず、その次には靈柩^{れいきゆう}車を頼もうとしたけど、当時はまだ木炭車しかなくて、峠がある雪の丹波路は通行が難しいとかで、断られたらしいね」

「木炭車つて、炭で走る車ですか」

大地がビックリした表情で言つた。

「そういえば以前、大勢の人が柩^{ひつぎ}を引いて歩いている写真を見た記憶があります」
馬淵が思い出したように言つた。

「信徒の大工さんたちが、真心込めて特別な靈柩車を作ったとかで、その靈柩車の柩を納めた上屋の部分は、今も大切に保存してあるそうですよ。

聖師さまがご昇天になったのは昭和二十三年の一月十九日で、確か十日祭が済んでから、綾部へ渡られたんじやなかつたかな。真冬で、しかも夜中の一時頃の出発でね、そりやあ、寒かつたと思いますよ。

それでも実際に靈柩車を引く志願者が大勢で、お供にはたくさんのお年寄りや女性までもが願い出たそうですね。“途中で死んでも悔いはない”という覚悟の人たちが多くつたというんだからね」

「昔の人の信仰心は、すごいですね」

馬淵が感心したように言つた。

「今日は車で觀音峠を通つてきたけど、当時の峠は相当厳しかつたらしいね。けが人でも出たら大変だと、担当者は現場で声を枯らしてお供を断念するように説得して、ようやく大半の人が觀音峠でお別れしたけど、それでもなお、四百人くらいの信徒は隊列から離れなかつたというから、たいしたものだね」

「四百人！」

大地は人数の多さに驚いた。

車は京都縦貫道の高架下をくぐり、直線から緩やかに左にカーブする坂道を上った。しばらくして丸山が左手の方を指差した。

「ほら、そこに大きな屋根が見えるでしょ」

大地たちも丸山が示した方に顔を向けた。今は金属で覆つてあるが、茅葺き屋根の面影を残す立派な屋根が目に入った。

「あそこは私の友人だつた北村さんという方のお宅で、実は、聖師さまのご遷柩の途中、葬列が昼食のために休憩をしたおうちなんですよ」

「そうなんですか」

「あのおうちの向こう側の山裾が旧道だつたそうです。北村さんはもう亡くなつたけど、昔、彼の家に行つた時に、ご神前横の床の間に、しばらく聖師さまの靈璽を安置していた：つて聞いたことがあります。彼は当時中学生くらいだつたそうだが、びっくりするくらいの大勢の人が来て、みんなが聖師さまの靈璽に向かつてお参りしていことを憶えていふと言つていたなあ。

綾部からも靈柩車の引き手の助つ人が来て北村家で合流し、綾部には午後三時半ご

ろに到着したというから、すごいよね。だつて午前一時に亀岡を出発して、午後三時半綾部着でしょ。全行程で十五時間かかっていないことになる。しかも重さ五百キロ以上の靈柩車を引いてだからね」

「そんなに重かつたんですか。それなのに現代人がただ歩いてかかる時間と同じ時間で歩いたということですよね。なんとすごいパワーですね」

「まつたく、昔の人はエライ！」

「そうそう、北村さんことで今思い出したけど、不思議な話があるんですよ」

「え、どんなことですか？」

「ある日、三代教主さまが北村家にお越しになつたことがあつたそうです。その時三代さまが北村さんに、”またちよくちよく来ることになる…通うことになる” という意味のことをおつしやつたそうです。

で、北村さんは”どういうことだろう？こんな山の中に、まさかそうたびたび来られることはないんじやないかなあ” と不思議に思つていたそうです。

ところが月日がたつて、家のすぐ上に思いがけなく新しい国道が開通したわけですよ。それ以降、三代さまは綾部にお渡りになるたびに、北村家のそばを通られるよう

になつたわけです。

それで彼は、『このことだつたんだ！　三代さまはいづれここに新しい道が通ることが分かつておられたから、たびたび通うとおっしゃつていたんだ』と話してくれたことがあります

とがありました』

「なるほど、それがこの国道だつたというわけですね。不思議な話ですね」

大地は頷きながら言つた。

「はい、皆さん、あの辺り」

丸山は話を変え、大地の顔の前に手を伸ばし、窓外の右前方を指差した。

「さつきの北村さんとこからこの辺りの地名を質志しちしといふんですけど、梅松苑内にある“木の花庵”は、ここから移築されたものなんです」

「あ、ここにあつたんですか。移築されたことは何度も聞いたことがありますが、

元の場所がようやく分かりました」

馬淵が納得したような口調で言つた。

「木の花庵？」

大地が、何ソレ…という表情で訊いた。

「あれ、雨宮君は知らないのかな?」

「はい、分かりません」

「梅松苑の金竜海の畔にある昔の典型的な農家の家なんだけど…。それを二代さまが譲り受けて移築されて、今では国的重要文化財になつている建物なんだよ。まあ、今説明するより、今日の午後からの神苑案内で、実際に見てからの方がいいかもね」

「は、はい」

「それがいいですよ」

馬淵も同意した。

「もう一つ、質志^{しちし}には名所があつてね」

そう言いながら丸山は前方を確認した。

「あのカーブを曲がつたらトンネルに入るんだけど、その直前の左側に鍾乳洞があるんです」

「鍾乳洞ですか」

「以前、北村さんも鍾乳洞の管理に関わつたので、彼の案内で私も一度だけ入つたことがあつたなあ。小さい鍾乳洞なんだけど、入口を入れてすぐにほぼ真下に降りる

階段があつて、なかなかのスリルなんですよ。それこそ今頃の季節に入つたから、中はヒンヤリとして涼しかつたですなあ！」

京都府内では唯一の鍾乳洞らしいが、ほかの三人は誰も入つたことがなかつたので実感が湧かず、何となく聞き流していた。

丸山の説明が終わるころ、車はトンネルを抜け、そこから先はしばらく下り坂になつていた。

坂道はさらに傾斜が深くなり、下りきつた先でほぼ九十度の急な右カーブになつている。しばらくすると「福知山市」という標識が目に入つてきた。国道一七三号線は、綾部市に入るまでに、途中福知山市内を通るコースになつてるのである。

ほどなく右手に擬宝珠^{ぎぼうし}がついた朱塗りの小さな橋が見え、その先の石段の上には神社の屋根^{やね}がそびえていた。

伊弉冉尊^{いざなみのみこと}、天照大神、月弓尊^{つきよみのみこと}をまつる「大原神社」である。「おおはらじんじや」と読みがちだが、由緒書きによると「おおばらじんじや」とのこと。古来この地方の安産信仰を司る神社としてたくさんの人々が参拝に訪れ、そのことを古く「大原志」^{おおばらざし}と言い、俳句の季語にも詠まれているという。

少女時代の三代教主さまが、よく馬に乗つて綾部からご参拝になつたという神社で

もある。

「ほらあそこ、田んぼの端に小さな藁葺き屋根が見えるでしょ」

丸山が右下の田んぼの中を指さした。ハンドルを持つ北原が少しスピードをゆるめ、すばやく右に視線を移した。

「あ〜、面白いものがあるんですね」

北原はすぐに前方に顔を戻した。

「ホントだ。あれは何ですか？」

大地も確認した。

「あれは、『産屋』と言つて、古来のお産の場所なんですよ。実際に大正時代までは使われていたとかで、古事記や日本書紀にもある安産、万物生産の神さまを生み出す場所ということらしいですね。『産屋』は昔の風習を今に伝えている貴重な建物なんですよ。だから大原神社は、安産祈願の参拝者が絶えず、昔から出産の聖地と言われていたそうです」

「由緒ある神社なんですね」

「それからもう一つ、とくつても興味深い話があるんですよ」

丸山が大地の顔を見て、ちょっと得意げな表情で話を続けた。

松香館と玉水

「丸山さん、どんな話ですか？」

大地が訊き返した。

「それはね、節分の豆まきの話でね…。普通一般では“鬼は外、福は内”という掛け声を掛けるけど、大本では“鬼は内、福は内”と発声することは知っているよね」

丸山が訊ねた。

「はい、知っています。五年前に節分大祭にお参りしたこともありますし、今回の修行でも、『大本の出現』の講座の中で、豆まきのお話がありましたから…」

「そうだったね。ところがさつきの大原神社おおはらでは、世間一般とはまる反対で、“鬼は内、福は外”って掛けるそうだよ。どう、面白いでしょ」

「へえ、また変わった掛け声ですね。どうしてですか？」

「それはね…」

と丸山は、以下の内容を概略説明した。

節分の口上で“鬼は内”とするのは、大本だけではなく、全国各地にある。大本の

ように、み教えに添つて、鬼が鬼門の金神・国常立尊だからという理由のところは
他に見つからないが、次のようにさまざまないわれを見ることができる。

- ・鬼子母神をご祭神とするから
 - ・寺に住む鬼が悪者を退治するから
 - ・祭つている神をまとめて鬼王というから
 - ・地名に「鬼」がついているから
 - ・商家で鬼を「大荷」として商売繁盛とつなげているから
 - ・内に招き、神仏の功德によつて鬼を改心させるから
- 大原神社では、最後の理由に近いが、悪さをする鬼を内へ迎え入れ、福の神として
お出ましいただくことから、『鬼は内、福は外』との口上を行つてゐるといふ。
また、藩主が九鬼家であつたため、名前に「鬼」がつくからという説もあるが、定
かではないようだ。

「悪いものは取り込み、良いものを施すつて感じですね。それもまた素晴らしいですね。
まあ、鬼が福の神に改心するのは、そう簡単じゃないような気もしますけど…。それ
にしても丸山さんはいろんなことをよくご存じですね」

馬淵が感心した。

「ほんと、博学ですね」

「いやいや、年の功というだけですよ」

「おかげさまで、退屈しない快適なドライブになりました。ありがとうございました」

「ありがとうございました」

馬淵に続いて、大地も礼を言つた。

「私も眠くならず運転できました」

北原も感謝した。

「いや〜、どういたしまして。さて、もうすぐ梅松苑に着きますね」

トンネルを抜け山間の坂道を下ると、右手に小高い井根山、前方には和知川に架かる新綾部大橋が見えてきた。車はその手前で左折。長生殿正門前を通り、坂道を下り切ったところでスピードを緩めて右折し、梅松苑内に入った。

：久しぶりだなあ。

大地は四年前のみろく大祭以来の来苑であった。

北原は松香館前に車を寄せ、大地たちは各自荷物を降ろした。

松香館は、信徒や来苑者のための宿舎・食堂・浴場が備えられた建物で、併せて梅松苑の本部事務所が置かれている三階建ての施設である。「松香館」の名称では、二世となる。

初代は第二次大本事件後の昭和二十五年、年々増え続ける来苑者に対応するために開設された。当時は新築でなく、グンゼ株式会社綾部本社の社員寮として使われていた建物を大本が譲り受け、増改築の後、昭和二十六年四月に完成した建物で、三代教主さまが「松香館」とご命名になった。以降、長く信徒に親しまれてきたが、長生殿完成後の平成七年、時代に合った姿で新たに建ち上がった。玄関右手上に掲げてある「松香館」の扁額は、昭和五十八年の尊師さまのご染筆によるものである。

大地たちは北原が車を駐車場に置いて戻ってくるのを待つて、受付に行き、簡単な説明を受け、二階の宿泊部屋に入つた。亀岡の安生館と違い各部屋置敷きである。少し遅れてJR組も到着し、それぞれ宿舎入りした。

綾部での最初のプログラムは、「神苑案内」である。しばらく休憩した後、午後三時、

修行者一同一階のロビーに集合した。

「皆さま、ようこそ綾の聖地、梅松苑にお越しくださいました。ではこれから夕拝までの間、神苑内をご案内させていただきます。私は、今回、綾部での皆さま方のお世話係をさせていただきます村野文代と申します。どうぞよろしくお願いいたします」

和服に木の花帯姿の小柄な細身の女性である。

「お願ひしま～す」

「あら、丸山さん、また来られたんですね」

「はい、村野さんに会いたくて…」

丸山が茶目つ気たっぷりに言つた。

「あら、それはどうも。：はい、冗談はさておいて、早速参りましょうか。では、皆さん靴を履いて、玄関前にご移動ください」

村野は何やら笑顔で丸山の方へ目配せをしながら先導して外へ出た。

「丸山さん、なんだか面白そうな人ですね」

村野は丸山に近づきながら小声でささやいた。

「そう、分かる、彼女の案内はバツグンなんだよ。今日も村野節がさく裂するか、樂しみだなあ～」

「村野さんはおいくつぐらいですか？」

「さあ？ 訊いたことないけど、還暦前くらいかな。まあ、私よりは若いね」

「それは、僕にも分かりますよ」

丸山がいつもに増してニコニコしているのが見て取れた。

一同靴を履き、外へ出た。亀岡よりはましん気がしたが、それでも夏の日差しはきつかつた。

玄関前に出た村野は、松香館を背に説明を始めた。松香館建設の歴史を一通り説明し、話は尊師さまの扁額に及んだ。

「えー、四代教主さまは松香館という名前が美しいので、やはりこの宿泊施設を『松香館』にするとお決めになりました。その昔、旧松香館の時に、役員さんたちが松香館に看板を上げようとして、その文字をどうするかという会議をしていましたんですね。そうしたところ、ちょうどその会議をしていた間に、尊師さまがピッタシ『松香館』とご染筆をなさったというのですね。皆さんもうビックリですよね。やはり、会議でもうかつなことは言えないなあ～ということだったそうです。尊師さまは何もかもお見通しだったんですね」

「へえ、面白いなあ」

大地が思わず口にした。

「はい、皆さま足元をご覧ください。ここに敷き詰められています石畳は、元は本宮山の頂上にあつたものです。本宮山神殿前の参道の敷石で四代教主さまのご指示のもとに、ここへ移されたものでございます。そして、この松香館前の植え込み周辺にありますいくつかの石も、実は本宮山からこちらへ下ろされたものです。“天の神が地に降りご神業のお手伝いをなさる”というその型を出されたのではないかとうかがっております。：はい、では玉水の方へ移動します。今日も暑いので、チャツチャと参りましよう」

村野は流れるような口調で説明をし、松香館前の駐車場のほぼ中央北側に立つ「玉水の泉」碑前まで案内した。

「皆さま、あちらをご覧ください。みろく殿の向こう側にあります金竜海の水に関しても、以前は和知川の水を汲み上げて満たし、再び和知川に戻していました」

…へえ、そうだったのか。

「平成十三年、現教主さまがご就任後、最初になさろうとしたのが、実は井戸を掘ることだったそうです。なぜかというと、教主さまは近年の世界的な環境汚染や多発する水害を大変憂慮されていました。そこで金竜海をこの聖地から湧き出る清らかな水で満たし、その清水を金竜海から和知川を通して大海へと流す”世界浄化の聖域”を出すことを願つておられたそうでございます。

そのお気持ちを受けて、専門家によつて苑内を徹底的に調査し、ボーリングのポイントを絞り込み、最終的にこの場所が選ばれ、掘削されることになりました」

村野が「玉水の泉」碑を指さした。

「それが平成十七年の三月十五日のことでした。この日に工事の安全祈願祭が行われ、翌十六日から掘削作業が開始されました。

工事が始まりますと教主さまは何度もここにお越しになつて”神言”を繰り返し奏上なさっていました。するとどうでしよう、その日の内に早くも水脈に当たつたのです。二日後には予定の百メートルに達したのですが、水量が思うように確保できず、さらに二十メートル延ばすことになりました。すると翌日には百二十メートルに達し、予定水量を十分に確保できるようになつたのでございます。

水質検査の結果は”大変に清らかで上質の水”であると、専門家が太鼓判を押すほ

どでした。関係者のお話ですと、この場所は“天地人がそろつた”誠に素晴らしい場所だつたということでございます。

通常ボーリングには二、三週間はかかるそうですが、全ての作業がなんとたつた五日で完了するという、まさに奇跡的な工事だつたのでございます」

…ここでそんなドラマがあつたのか。

「はい皆さま、碑の後ろ側にお回りください。裏を見るのは初めてですか？」

大地が感心する間もなく、村野は説明を続けた。

「はい、初めてです」

東川芳が答へ、つられるように大地ら数人も「初めて」とつぶやいた。

「まあ、良かつた。では、よくご覧ください、ここに平成十七年六月九日と刻んでありますね。この日は人類愛善会創立八十周年の記念日で、かのモンゴルのウランバートルでは、人類愛善会モンゴルセンターの発会式が開かれておりました。

そしてこの場所では、教主さまご臨席のもと『梅松苑井水汲上げ始めの儀』が行われておりました。そうして、玉水はみろく殿前の御手洗横の泉から湧き出し、水路を流れて金竜海へと注がれました。このようにして聖地で湧き出たとても清らかな“玉水”というお水が、和知川を下り世界の海へと広がっていくことになつたのでござい

ます」

…そういうことだつたのか。

全員が感心した表情で頷いていた。

「はい、では皆さまこちらへお進みください」

村野は修行者一同をうながして、みろく殿の方へ向かつた。

いざ、天国巡覧へ

村野文代は修行者一同を先導し、駐車場から苑内の車道を横切り、みろく殿への短い坂の手前で立ち止まつた。

「はい皆さま、ここが天国の入り口になります。みろく殿前のこの一帯が第三天国に相応します。そしてその上、長生殿が立つ鶴山平一帯が第二天国に相応し、さらに歴代教主・教主補さまの奥都城おくつるぎがあります天王平が、第一天国・最奥天国に相応します……と聖師さまがおっしゃっています。決して私が申しているのではありません(笑)」「そりや、そうだ」

丸山が笑いながら相槌づちを打つた。

「はい、間違いございません。ではこれから“天国巡覧”に参りますが、天国でのお参りでは、あちこちで天津祝詞を奏上いたします。これから、皆さまには修行が終わるまで、なんと二十回ほど天津祝詞をあげさせていただことになります」

「えつ、そんなに?」

大地は思わず口に出してしまつた。

「アラ、なにかご不満でも?　えへと、雨宮さんでしたつけ」

村野は大地の胸の名札を見ながら冗談っぽく言つた。

「いえ、何もありません」

「そうですか、よろしゅうございました。はい、では早速参りましょう」

村野は笑顔を振りまきながら、一同を先導して歩を進めた。そしてみろく殿の正面で立ち止まり、梅松苑の神苑について説明を始めた。

「亀岡の天恩郷は、明智光秀の城址ですが、こちらはその昔、『九鬼』：九つの鬼と書く九鬼のお殿さまの城がありました。お城がなくなつてからは、小さな『本宮村』という集落がありました。私たちが今入つて来たところは当時、大島景僕さん宅の敷地でした。この土地のことについては、開祖さまのお筆先にいろいろと出てまいります。

『神に因縁のある屋敷であるから、此の屋敷に大地の金神様の御宮を建てるぞよ。大島の家売つて下されよ。角藏殿退いて下されよ。金助殿家持つて退いて下されよ。治良右衛門殿家持つて退いて下されよ。氣の毒乍ら村中家持つて退いて下されよ。此の村は因縁の有る村であるから、人民の住居の出来ん村であるぞよ』と神さまが申されました。

そこで多額の保証金を用意して、皆さまに立ち退いていただいたそうであります。

その後、ここには『金龍殿』という建物が建ちます。そこには神さまが奉斎され、
祖靈さまもお祀まつりしてありました。何とその当時は、二百人とも三百人ともいわれる
くらい、修行者がお見えになっていたそうですよ。今とはぜいぶん違いますね」

……すごいなあ。

大地はまた驚いた。

「それから金龍殿は、若き日出麿先生…つまり高見元男青年が、大先生…聖師さまと
初対面された舞台でもありました。高見青年は金龍殿のご神前に座られたとき、止め
どなく熱い涙があふれ、『どうしても解けなかつた永遠の生命の謎を、ここは解いてく
れるかもしれない』と思われたそうでございます。

金龍殿の右後方には『統務閣』という建物がございまして、そこでは開祖さまがお
筆先をお書きになり、また三代教主さまがお茶やお花のお稽古をなさつた…、と史実
に残されています。さらに統務閣の後方には、『教主殿』が立つておりました。

それから、向こうの松林の辺りですが…」

そう言つて玉砂利が敷き詰められた広場の先を指しながら話を続けた。

「あそこには『黄金閣』という建物と開祖さまのご神靈をおまつりした『教祖殿』といふ建物がきざはしでつながつて立っていました。金竜海も今の倍くらいの広さでしたので、二つの建物は、金竜海にぽつかりと浮かぶように立っていたようです。そしてこちら…」

村野は、天に向かつて悠然と枝を広げ、風に葉をなびかせているご神木の“榎”を見上げた。それに合わせて大地たち修行者も榎に目を移した。

「大本は大正十年と昭和十年に、国家から不当な弾圧を受けました。昭和十年の第二次大本事件では、今ご案内した建物をはじめ、苑内の全ての建造物がことごとく破壊されました。そんな中で唯一、この榎だけが難を逃れ、残つたのでござります。

この榎は当時、四方源之助という方の家の中庭にございました。四方源之助さんは前綾部市長のおじいさままで村の世話役をされていたそうです。

榎には八百万の神々さまが宿つているとのことで開祖さまは『たくさんのおられるのやで』とおっしゃつていたそうで、大本ではご神木でございます。樹齢約百六十年、高さ十八メートル…、今はもう少し高くなっているかと思います。

ちなみにあの“みろく殿”的屋根が二十一メートルですからね。

皆さん、榎の実をご存じでしようか?」

村野が丸山の方へ目を向けた。

「いや、知らないというか、気にしたことがなかつたですなあ」

視線を感じた丸山が即座に答えた。大地も首をかしげた。

「まあ、そうでしようね。ちょうど山椒の実のようになるのですが、秋になると赤い小さな実をつけます。二代さまはこの実に、金の龍の夫：『金龍夫』と名付けておられます。

はい、では皆さま、もう少し前に来てください。榎さんの前でお参りさせていただきますよう。こちらで天津祝詞を奏上いたします。ご神号奉称“はございません”、“惟神靈幸倍ませ”だけです。では先達を……」

と言いながら、村野は修行者の顔を一通り見回した。

「えつ、村野さんが先達するじゃないんですか?」

大地は、丸山に小声で訊いた。

「彼女はいつも誰かに振るんだよ、交代でね」

「そうなんですか」

「やつぱりトップバッターは、年長者の丸山さんかな」

村野が指名した。

「ほら来た」

「ほんとだ、半強制的ですね」

大地は小声で言つた。

「では丸山さん、こちらへ。よろしくお願ひします」

「心得ました」

そう言うと丸山は一同の前へ進み、^{えのき}榎前にある八足の中央へ進んで先達を務めた。一同、丸山に合わせて天津祝詞を奏上した。

真夏の日差しが強いものの、時折頬に当たる風が心地良く、神苑の木々にしがみついて声を限りに鳴くセミの声も、一緒に祝詞をあげているようにも感じられた。

「丸山さん、ありがとうございました。では皆さま、続いて参りましょう」

村野は榎の右手の方へ歩を進め、三角形の大きな石碑の前で立ち止まつた。

「はい、これは見てお分かりですね、『梅松苑碑』です。ここ綾部市本宮町一番地の大

本本部の神苑全体を梅松苑といいます。梅松苑は第二次の弾圧後、事件解決奉告祭が行われた昭和二十年十二月八日に聖師さまがご命名になつたのですが、さて、この文字を書かれたのはどなたでしようか？」

村野が誰ということなく質問し、全員の顔を見回した。

「四代さま？」

村野と目が合つた一人の婦人が小さな声で言つた。

「そうです、四代教主さまです。正解して良かつたですね」

答えた婦人は、胸をなで下ろしたような笑顔を返した。

「で、四代教主さまのこうした碑は、綾部のここにしかありません。全国でも、これだけだそうです。ですから、とても貴重なのです。」

それで梅松苑はどういうところかというと…、天国の様子を地上に移写されたところで、天国の中でもおまつり…祭祀のありようを移されたところだということです。

私は最初、綾部は何となくホワーンとしているから天国かなあ～と思つていましたが、そうではなかつたんです（笑）。天国を移写されたからなのですね。

私たちは今、そこを歩かせていただいているわけです。そしてこの神苑には、神さ

まがいつぱいいらつしゃいまして、私たちがこうして歩くときには、神さまが道をあけてくださっているそうですよ。ありがたいことですね。どうですか、見えましたか？

丸山さん

「いえ、見えません」

丸山が即答した。

「はい、私も見えません（笑）」

村野の返しに、笑いが起こった。

「では質問しますよ。この文字をお書きになつた方は？」

村野が石碑を指さし、さらに一段大きな声で言つた。

……なんだ、復習か。

いきなりどんな質問が来るのかと身構えていた大地は、少しホッとした。すかさず数人が声をそろえて答えた。

「四代教主さま」

「はい、四代教主さまですね。お懐かしい四代さまを、皆さまお忘れにならないようにお願いしますね。はい、それでは次はこちらへ…」

村野の演劇風のテンポある話し方が調子よく、つい引き込まれていく。

：面白いなあ。

大地がそう思う間もなく、村野は皆を促し、軽快に草履の音を響かせながら先へと進む。大地たちも遅れじと、村野のあとに続いた。

元屋敷

「はい皆さま、こちらまでお越しください」

梅松苑碑の西側、檜垣の手前の苔むした一角で村野が立ち止まつた。

「ここはその昔、開祖さまがお過ごしになつた出口家のお住まいがあつたところで、『元屋敷』と呼ばれている場所です。明治二十五年旧正月、節分の夜に開祖さまがご帰神され、後にお筆先を啓示された由緒深くい”大本発祥の地”です。大本はここから始まつたわけです」

…そうか、ここが大本の発祥の場所なのか。

大地は心中でつぶやいた。

「開祖さまは、福知山のご生家、桐村家からここに嫁いで来られました。ご養子先の出囗家の大きなお屋敷が、かつてこの一帯にありました。当時はもつともつと広かつたわけです。ところが開祖さまがご結婚されて間もなくのこと、ご一家の生活は困窮を極め、田畠は人手に渡り、家財道具も次々に持ち出されます。そして暮らし続けた屋敷もとうとう売らざるを得なくなり、最後にはわずかな土地だけが残つたのでした。さて、ここである方もお生まれになりました。どなたでしょうか？」

村野は目の前の修行者を見回しながら訊ねた。

「二代さま：かな」

馬淵光彦が小さい声で答えた。

「はい正解です、出口すみこ二代教主さまですね。二代さまは開祖さまご夫妻の八番目のお子さん、末っ子としてお生まれになりました。その時に産湯として使われたのが、元屋敷もとやしきの中央にあるこの『銀明水』ぎんめいすいの井戸です。

二代さまが後に書き残しておられるご著書『おさながたり』には、その当時、四十八坪の土地だけが残っていたとあります。

また、聖師さまはこの土地について、『古来坪つぼの内うち』と称し、平素空地あきらちであつて作物もせず、建物もせず、人々の手を出さぬ所であつたと示しておられます。神さまがそのようになさつていたのですね。

ちなみに、"坪の内"というのは、"建物や垣に囲まれた狭い庭"という意味があります。お茶室の庭のことを"露地ろじ"と言いますが、もともとは狭い路みちの地とすることで"路地"と呼ばれていたようです。さらにそれ以前には、茶室に付随した狭い庭ということで"坪之内"と呼ばれていたみたいですね。』

「坪の内つて、そんな意味があつたんですか。知りませんでした」
丸山が感心した表情で言つた。

「はい、そうなんですよ。その坪の内の空き地に、明治九年、開祖さまと夫・政五郎さんご夫妻は山から材木を運ばれて、ささやかな藁葺わらぶきの家を新築されました。皆さん、講座で聞かれたように、政五郎さんは腕のいい大工さんだつたわけですからね。でも、その建物は畳の間が二部屋と、二畳分の板の間と土間だけの小さな家でした。この時に、庭に井戸も堀り上げられました。それがここにある井戸で、後に『銀明水』と命名されたのです。

それから七年たつた明治十六年の節分に、二代さまがお生まれになつたのですが、その時にはすでに家の壁は破れ、屋内には吹雪が吹き込むような惨憺さんたんたる状態だつたそうです。

今から数年前、その『元屋敷』の復元模型が製作されましたが、それを拝見すると、なるほど質素なおうちであつたことが分かります。丸山さん、ご覧になつたことありますか?」

「はい、一度見ました。確かに質素な家でしたなあ」

丸山が記憶をたどるようにして言った。

「二代さまがお生まれになつてからのお口家のご生活はとても苦しいものでした。まさに赤貧の状態だつたわけです。運悪く夫の政五郎さんは、現場の庇から落ちて半身不随になつて寝たきりになられ、途端に収入がなくなつてしまします。開祖さまは四女のりょうさんを背に、二代さまを懐に抱かれながら、毎晩遅くまで四升のお米を石臼で粉にひかれて、饅頭作りをされていました。次男の清吉さんがその饅頭を売りに歩かれ、家の軒先にも饅頭を並べて、開祖さまが子供をあやしながら売っていたのです」

⋮ここで饅頭を作つておられたのか。どんな饅頭だつたのかなあ。

大地の知識では、想像することも難しかつたが、大本の歴史が少し身近に感じられた気がした。

「それでも、饅頭売りだけでは生活が成り立たず、どうどう行き詰まつてしまわれます。そこで明治十九年から、開祖さまは資材も資金もいらなかつた紙くず買いを始められました。今の言葉で言うと“古紙回収業”でしようか。開祖さまは朝早くから夜が

更けるまで、子供たちを家に残して働かれました。

後に神さまは、この紙くず買いは、神界からのお仕組みでさせられたもので、もの正しい神々さまをひろい集め、世にお出しする型であつたと示されています。ペー・パーのカ・ミ・が、神さまのカ・ミ・に通じていたわけですね」

…そんな型があるのか。

大地は不思議に思つた。

「この時、二代さまはまだ三歳です。夜遅くなると、留守番をしていた幼い姉妹は心細くなり、家の外に出て、開祖さまのお帰りを待つていました。やつと開祖さまがお帰りになると、清吉さんや三女のひささんが手伝つて、紙くず、ボロ布、毛類とより分ける作業をされました。

このような仕事は、現代の廃品回収のようなことではなくて、当時の社会では資源を再利用するリサイクルシステムとしての仕事としてあつたそうですね。しかしながら当然、そんなに稼げるものでもありませんでした。

ということで、開祖さまはそれをお金に換えて、わずかな利益で少量のお米を買いたい求められて、一家六人を養わっていたんですね。これは今の私たちには想像もでき

ないようなご苦労だつたと思ひます」

見ると近くにいた梯洋子は、真剣な顔つきで何度も小さく頷いている。講座の中で
も紹介された話であつたが、元屋敷もとやしきという現場で聞くと、さらに深く心に響くものが
あつた。

「そんなお母さんのご苦労に日々接しながらもみじめな生活が続き、ある時ひささん
が、こんなことをつぶやいてしまいました。

『お父さんもあんなにして生きとつてんよりも、いつそのこと亡くなられた方が樂で
あろうに』

すると開祖さまは怖い顔をされて、『世界中お前が鉄の草鞋わらじで探しまわつても、お前
のお父さんという人はこの人一人やないか。病人は、世話をするものが飽いたら死ぬと
いうことがある。私はまだ病人の世話には飽いとらん。生きておられる間に大事にし
とかなんなら、死んでしまつてから涙が止まらぬことがある。お父さんのもの一つ見
ても、もう少し孝行しておきたかつたと思ひ出して泣けるで、生きておられる間に充
分に孝行してさえおけば、後悔が残らぬものじゃ』と、諭されたそうでございます。
開祖さまの深い愛と慈しみの心が偲ばれるエピソードだと思います』

村野の語り口調に、大地たちも神妙な表情で聞き入っていた。

「病床の政五郎さんは、最初わがままを言つておられたそうですが、だんだんと開祖さまのお心に感謝されるようになり、後には紙くず買いに出掛けられる開祖さまの後ろ姿を寝床から、震える手を合わせて伏し拝まれていたそうです」

しみじみと語る村野だつたが、急に明るい声になつて、馬淵の方に目をやつた。
「馬淵さん、奥さまに手を合わせたことはありますか？」

「えつ、いきなりですね、どうでしよう？お小遣いの値上げをお願いするときに、手を合わせたかも…」

馬淵の切り返しに、小さな笑いが起こつた。

：馬淵さん、ナイス。

「あら、失礼しました。くれぐれも奥さまを大切にしてください。皆さまもね」

「はい、もちろん」

丸山が即答した。その答えに笑顔で軽く頷いたかと思うと、村野はすぐに口調を変え、また真剣に話しだした。そのしゃべりの変化がまた、一同の集中力を高めるようであつた。

「そしてほどなく、政五郎さんは明治二十年に六十一歳でご昇天になつてしましました。開祖さまは深い悲しみの中で、こうおつしやつたそうです。『生命は助けていただけんでも、せめてもう少しお世話がしたかった』と…。何とも深いお言葉ですね。

そして五年後、いよいよ開祖さま五十七歳の明治二十五年の節分の夜、最初のご帰神があつたのでした。文字を読むことも書くこともできなかつた開祖さまが、神さまが命じられるままに、筆をとつてお筆先を書かれたのです。

一連のことは『大本の開教』の講座でお聞きになつてていると思いますので、あらためては申しませんが、このように、さまざまな“ドラマ”的舞台となつたのが、ここ元屋敷もとやしきでした

村野の流暢な説明に、一同は頷きながら耳を傾けていた。

「開祖さまはひたすら世の平安を祈り続けられました。生涯のご苦労は並大抵のことではありませんでしたが、決してご自分のことを祈られることはなかつたそうです。世界のため、人々のため、『世の大難を小難に、小難を無難に』という祈りに徹しておられました。この祈りのあり方が、私たち大本信徒の祈りのお手本です。

皆さまもせつかく大道場修行にいらっしゃったのですから、今日は父ちゃん、母ちゃん、子供のこと、家のこと、自分のことはちょっと忘れて、祝詞奏上の時には世界平和をお祈りいただきたいと思います。よろしいでしようか？

：おや、皆さん、神妙なお顔をされていますね』

笑いを誘いながらであつたが、村野の言葉には妙な説得力があつた。

：分かりました。

大地も心の中で頷いていた。

金明水

「では皆さん、回れ～右！ 前へ～、進め！」

村野は、体育教官調で発声。また笑いが起こり、大地たちは自然と、その掛け声通りに動いた。

「はい、ストップ。行き過ぎた人はバツクしてください」

村野はそう言いながら、すばやく一同の近くまで走り寄り、説明を始めた。

「こちらが金明水の井戸です。さて、どなたの産湯に使われたでしょうか？」

「三代さまです」

すかさず馬淵が、今度は自信ありげに答えた。

「はい、正解。そうですね、三代教主さまの産湯に使われたのが、この金明水です。先ほどもご紹介しましたが、大本が開教したころ、この辺りには大島景僕さんという方の屋敷がありました。この井戸もその敷地内にあつたものです。

さて皆さん、初日の講座で聞かれたことと想います、大本の草創期に一連の“出修の神事”があつたことを憶えていますか？ 憶えている人？」

村野は挙手を促すように、すばやく自分の右手を上げた。それにつられる者はなかつたが、大地ら数人が、少し間を置いて小さく手を上げた。正直、大地は自信がなかつたが、とりあえず場の雰囲気を読んでそうした。中には首をかしげる人もあつた。

「あら、手の上がつてない方もありますね。どういうことかしら？ 講座中、夢の中でしたか？」

また笑いが起つた。

「大本には、独特的の祭儀である“出修”という神事がありました。聖師さまが大本入りをされた翌年の明治三十三年旧七月、開祖さま、聖師さま、二代さまによつて、”

冠島開きと沓島開き^{おしま}の出修^{しゅつしゅう}の神事が行われましたよね。

そして、その翌年の明治三十四年四月、『元伊勢お水のご用』の出修^{しゅつしゅう}の神事がありまして、丹後の元伊勢にある、産盥^{うぶだい}・産釜^{うぶがま}からいただいた清らかな『水晶のお水』が、この井戸に注がれました。

この出修^{しゅつしゅう}の神事が行われる前には、世界広しいえども、生粹の水晶のお水というの^はは、元伊勢の天の岩戸の産盥^{うぶだい}・産釜^{うぶがま}のお水よりほかにはないので、その水晶のお水を汲んで来ねばならぬ^くという意味のお筆先が出ていますし、良の金神の指示でないと、このお水は滅多に汲みには行けんのであるぞよ。この神が許しを出したら、どこからも指一本さえるものもないぞよ^くとも示されています。

それから同じ年の七月、開祖さま、聖師さま、二代さまご一行は、今度は島根県の出雲大社にも行かれて、ご神火と清水と社の砂を持ち帰られています

：あ、確かにそんなお話を聞いたような。大地は、初日の講座を思い出していたが、やはりうろ覚えだつた。

一連の村野の説明は、聖師さまの「わが半生の記」（『出口王仁三郎全集』第八卷）をもととしていた。それが以下の文章である。

明治三十四年旧五月十六日、出口開祖はじめ上田会長（聖師さま）、出口澄子（二代さま）、四方平蔵、中村竹造、内藤半吾、野崎宗長、木下慶太郎、福林安之助、竹原房太郎、上田幸吉、杉浦万吉等一行十五人は、皐月の曇つた空を目当てに、徒步にて出雲の大社へ神命を奉じて参拝することとなつた。……（大社にて）二、三日逗留の上、神火と御前井の清水、社の砂を戴き、二個の火縄に火をつけて帰途につき……又もや山坂を越えて、旧六月の四日、福知山まで数百人の信者に迎えられ、ようやく綾部へ帰つて來た。……

それからその火を百日間埋み火として役員一人が昼夜保存し、百日目に十五本の蠟燭に火を点じ、天照大御神さまへ棒げることとした。また砂を本宮山や龍宮館の周囲に撒布し、三、四カ所の井戸に水を注ぎ、大島の井戸へ天の岩戸の産鹽の水を一緒にしてほり込み、金明水と名をつけたのである。その水を竹筒に入れ、その年の六月の八日に開祖は会長、澄子その他四十人ばかりの信者と共に沓島へ渡り、その水を海上に投じ、この水が世界中を廻つた時分には日本と露国との戦争が起ころるから、どうぞ大難を小難に祭りかえてもらうように、元伊勢のお水と、出雲のお水と龍宮館のお水と一緒にして龍神さまにお供えするといつて、祈願をこめて帰つて来られたが、それ

からちようど三年目に、日露戦争が起こつたのである。……

村野はこの聖師さまのご文章をかみ碎き、“出雲火のご用”や元伊勢の水晶のお水が、この井戸に注がれたあとに金明水と命名されたことなどをかいづまんで説明した。

「元伊勢の水晶のお水が注がれた金明水は、国祖ご退隱の地・沓島めしまと冠島おしまの中程ほほどの間…大本で“竜宮海”と呼ばれている海域に注がれ、世界を清める重要なご神業に用いられました。なんとそれからちようど三年目に、日露戦争が起こつたんですね」
…そうそう、日露戦争のことも講座の中で聞いたような気がするぞ。」

大地は、記憶をたどっていた。

「このお水は“今に京都、大阪からももらいにくくなる”とお筆先にあり、実際今、その通りになつていますね。」

“そんなことは珍しいことじやないんじやないの”…と思われるかもしませんが、そのころの交通手段からすると、綾部から見ると、京都や大阪もかなり遠い所でしたから、きっと“ホントかな?”と思われた人もあつたでしょうね。でも、今では全国

の多くの方々が金明水を持ち帰られ、おかげをいただかれています。ねえ、丸山さん

村野が丸山の方に目をやつた。

「そうですよ。私の周りでも、金明水のご神水でおかげをいただいた人が何人もおられます。とてもありがたいお水です」

丸山が言つた。

「そんなありがたいお水ですが、実はあのみろく殿前^{ちようぜん}の大きな手水鉢^{ちようばつ}のお水は、この金明水の井戸から汲^くみ上げて送つているものです。手水鉢^{ちようばつ}の後ろには、蛇口^{じゃく}が設置してあって、そこからも金明水を汲^くむことができます。ですから皆さん、いつでもいただくことができるんですよ。実際、綾部の市民の方や、信者さんでない人も汲^くみに来ておられます」

村野の説明に、手水^{ちようず}として使つている水が金明水であることを、初めて知つたように驚く修行者もあつた。

「それから、長生殿やみろく殿などでの朝夕拝のお給仕や月次祭でお供えするお水も、金明水を使わせていただいているんですよ。ですから、老松殿のご神前でいただけるご神水は、神さまにお供えしたお下がりの金明水です。あとで夕拝に参りますが、皆

さまもご神水をいただいて、しつかりご神徳をお持ち帰りくださいね」

「はい」

丸山が元気よく返事をした。

「昭和十年の第二次大本事件では、先ほどの榎^{えのき}だけが残って、あとはすべて破壊され、この一帯はグラウンドになっていたということをお話ししましたが、事件後のことです。開教六十年を翌年に控えた昭和二十六年の七月十八日、この綾部の神苑復興の手始めに行われたのが、金明水の井戸を掘り上げることだつたのですね。

当時ご奉仕していた若い人たちが張り切りました。地面は埋められて元の敷地よりも高くなつていたようです。苑内の様子が変わつて、井戸の場所もすぐには特定できず、古い図面や写真、それぞれの記憶をたどつて掘つていつたんだそうです。

七月も半ばですから、きっと暑かつたでしようが、女人たちも立ち交じつて作業をしていつたそうです。

するとその日の夕方、一点ボコッと穴が開いて“見つかつたぞ”と声が上がつたのです。さらに一鍬^{くわ}打ち下ろすとカチッと音がして、井戸枠の一部が顔を出したんです。“あつた！　これだこれだ”とみんな大喜び。十五年もの間、土中に埋もれていた金

明水の井戸が、再び現れた瞬間でした。

さつそく亀岡におられた「一代さまに電話でご報告したそうです。二代さまもさぞお喜びになつたことでしょうね」

まるで見て来たかのような村野の語り口調に、大地たちも話に引き込まれていった。

「翌日も作業を続けると、出るわ出るわ、石燈籠^{いしとうろう}のような大きなものから、石のお宮の一部、神具や土器^{かわらけ}のかけらがザクザクと出土したのです。それらがうず高く積まれるほどでした。

それに加えて、百個にはなると思われるほどの聖師さまのお手造りの楽焼き茶盤^{わん}の破片^{はっぬん}が出てきたんですね。その中には、奇跡的に完全な形のお茶盤^{わん}もあつたそうです。ほかにも大本の歴史上、貴重な品々もいくつか発見されました。

ちなみに、その時の記事が当時の機関誌「愛善苑」に掲載されていて、その中に、団扇^{うちわ}を持たれた飛びきり笑顔の二代さまのお写真が掲載されているんです（前頁カット写真）。その写真説明には、『出土品をご覧になる苑主』と記されています。

そのお顔を拝見すると、思わずうれしくなって、こちらも笑顔になるんです。当時

の人たちは、本当に大きなご用をなさつたんだなあ、としみじみ思います。皆さん
は今、こうして美しくてすがすがしい神苑をゆっくり拝見させていただけるわけです
が、その陰には先人の方々の献身的なご奉仕の力があつたらばこそなんですね」

村野がしみじみと語つた。

：ありがたいなあ。

大地の胸に、じんわりと熱い気持ちが湧いてきた。見るとほかの修行者の表情にも、
同じ思いが表れているようだつた。

みろく殿

「では皆さま、みろく殿の方へお戻りください」

村野が促した。大地たちは、梅松苑碑の前を通り、榎の前まで戻ってきた。気温もだいぶ上がりつてきたようで、蝉の鳴き声が一段と賑やかになつていて思えた。「皆さまよくご存じのみろく殿です。大きいですねえ。このご神殿は、第二次大本事件が解決し、大本が再発足してから初の神殿建築物です。

ですから、両聖地の中で現存する神殿では最も古い建物ということになります。
平成四年に長生殿が完成するまでの四十年間、みろく殿は綾の聖地の中心神殿として、数多くの歴史的な祭典が執行されてきました。

現在は、『祖靈殿』として、大本信徒の先祖をまつる『祖靈社』や、戦争や災害、不慮の事件・事故などの犠牲となつた世界の多くのみたまをおまつりする『万靈社』があり、とても大切な『みたまつり』が日々厳修されています。

あの玄関の扁額^{へんがく}『弥勒殿』^{みろく}は、事件前の旧五六七殿内の拝殿正面に掛けてあつた聖師さまご揮毫^{きごう}の書を写真複写で縮小し、檜の板に彫つたものです。ここからだとそんなに大きくないう�見えますが、おおかた畳一枚ほどの大きさがあるんですよ」

：そんなにあるのか。

大地はちょっと驚いた。

「みろく殿は、拝殿だけでも七百八十九畳敷きの広さで、鉄骨材と木材を巧みに組み合わせて建てられております。そして、平成二十六年四月二十五日に、正式に国の登録有形文化財に登録されました。『物資不足の昭和二十年代によく工夫された大建築物』との評価を受け、文化財の登録となつたんですよ。おめでたいことですね」

「へえ～、みろく殿つて、文化財なんだ。

「現在のみろく殿は、二代さまのお言葉によつて建設が始められ、昭和二十八年四月に大神さまをお祭りする神殿として完成しました。残念ながらその約一年前、二代さまは完成をご覧になる前にご昇天になりましたが、建設前にはみろく殿を建てる意義を訴えておられました。

当時は戦後の物資不足はもとより、信者さんたちもその日の生活に懸命だった時代でした。ですから当然教団の財政も厳しかったわけですね。事実、昭和二十五年の年末には、当時の金額で百二十万円の赤字決算が見込まれていて、秋に開かれた全国の

支部長会議で、その窮状が報告されていました。

教団の執行部も、できるだけ信者さんに負担を掛けたくないと思つていたようで、無理に神殿を建てなくともいいのでは…という考えが主流だったようですね。

それでも、二代さまは、みろく殿を建てる意義を信徒に訴えておられました。それは神さまがぜひともと望んでおられるから…というものだつたんですね」

と説明しながら、村野は昭和二十五年八月二十五日の瑞生大祭で、参拝者に対しても述べられた二代さまの以下のお話の要約を、綾部弁を交えながら語り口調で伝えた。

「どうしてもここに宮（みろく殿）を建てたいのや、これはみんなして、たとえ十円ずつでも誠の者がさしていただきたいたらできるのや、そのつもりでたんと働いて始末して、ためおくんなはれや、頼みます。（中略）

次々と皆にはご苦労じやが、遠慮しておつたり控え目に言うておつたら、神の思惑たたんと神さまが言うてんのや、人間心を捨ていと言うてんやさかい（後略）」

〔愛善苑〕昭和二十五年九月十五日号)

…神の思惑がたたんと神さまが言われているつて、なんかスゴイなあ。

大地が胸の内で呟いた。

「さあ、このお言葉ですぐに建設計画にかかりました……と言いたいところなのですが、なかなかそこは、執行部も信徒に負担が掛かることを懸念して、すぐには腰を上げなかつたようですね。丸山さん、どう思います？」

「まあ、赤字決算だと、普通はためらつてしまふでしようなあ」

丸山がポツリと言つた。

「ですよね。で、結局、計画が前に進みだしたのは、七ヶ月もあとだつたそうです」

「ほほお～」

「それもですよ、綾部市長から、舞鶴の旧海軍航空隊が使用していた飛行場の鉄骨の建物を払い下げてもらつてはどうか、という提案を受けたからだつたんですね。で、それはいいね、ということになつたわけです」

「村野さん、なぜ綾部市がそんな提案したんですか？」

「いい質問ですね、丸山さん」

村野が返した。

「実は、その一年前、綾部市が水道施設を計画するに当たつて、どうしても本宮山の一部を使用させてほしいと大本に申請があり、二代さまがこれを快諾なさつていまし

た。本宮山では当時、その上水道工事が進められていたんですね。それで執行部がその見返りに、飛行場の建物、：飛行機の格納庫か何かでしようか：、それを綾部市に購入してもらって、大本に払い下げてもらえないかと願い出たわけですよ。要は交換条件だつたわけですね」

「なるほどね」

丸山が頷いた。

「ところがですね、待てど暮らせど、一向に話が進展せず、半年後の十月の月次祭の夜、業を煮やされた二代さまが、みろく殿建設についての強烈なお言葉を述べられたのです。それをもつて、教団の空気が一変することになるのでした」

村野のジエスチャーを交えた語りに、大地も身を乗り出すような気持ちになつて耳を傾けた。例によつて村野が少し間を置いてから、以下の二代さまのお言葉を、緩急付けて語つた。

「これから先、世界に大本の道がひろがつて、人がドシドシ来たりすると、この祭（月次祭）でさえ一杯やのに、節分には寒い外に立つてお礼をせんならんから、みろく殿が早

う建たんとかなわんわい。しかしそうかといつて金がないわい。こういうても仕方ないし、
建てかけたら出でき来るのや。（中略）

あの頃（田五六七殿建設当時）には信者がなかつたやろ、それでいて始めて、あんな
立派なものに出来上がつたのや。今のように、大本のたくさんの中者が全国に何万とい
うほどいて、みろく殿一つもよう建てんようでは、へン笑われるでつ。（中略）

とにかくみろく殿を建てるには、金はあらへんわ。そこをするのが神さまのご都合や。

（中略）

もつとはげみなはれ！」

〔木の花〕昭和二十七年十一月号

「当時、二代さまのお言葉を直接伺つた信徒は一様に、神さまから“一喝”をいただ
いたようだつたと思つたようです。そして、そこから一気に氣合いが入つたそうですよ」
「それはそうでしようなあ」

丸山が頷きながら言つた。

「それで、軍の資材の払い下げ…、つまりは中古物件を諦めて、新しい資材で建てる
方向へと根本から一変し、一気にみろく殿建設の盛り上がりを見せるようになつたの

でした。めでたし、めでたし……です

「まあ、でも、国祖の大神さまをお祭りするのに、中古物件じゃ申し訳ないですなあ。ましてやこの綾の聖地の中心的神殿でしょ。神さまが許されなかつたんじやないかなあ……つて、独り言ですよ」

丸山がそう言うと、馬淵も、そ�だそ�だと言わんばかりに相槌づちを打つた。

「……ですよね。それによくよく考えたら、二代さまが一喝された時期は、ご昇天になる半年前のことなんですよ。きっと二代さまはもう、時間がないということもご存じだつたのではないでしようか」

村野がしんみりと呟いた。

……あつ、そういうことか。

大地はあらためて、神さまの言葉・神意が、教主さまの口を通じて伝達されたという事実に気付かされた思いがした。

「さて、いよいよみろく殿の建設計画が決議され、方向が定まつてスタートしました。秋の大祭では二代さまが再び、『貧しくなつても神さまはあとで万倍にして返されるのや。（中略）しつかりして働いて、なんぼでもご用をしな、ひつこんでいたらあかんで！』

とおっしゃって、会場から笑い声とともに、大きな拍手が湧き起こつたということでした」

「さすが二代さまですね」

馬淵が言つた。

さらに村野は話を続けた。

「ようやくみろく殿の造営局が発足したのは、昭和二十六年の末のことです。その後、京都府の建設許可がわずか五日という異例の早さで下りたとか、危うい事故も間一髪で人命に及ばなかつたという奇跡的なおかげをいただいたとか、いろんなエピソードがあつたようですが、今日は時間もありませんので、省略します」

⋮アララ。

「ただ、残念なことに、二代さまは工事が始まつてしまふらしくした昭和二十七年の三月中旬から、ご病気のために、亀岡・天恩郷の瑞祥館でご静養に入られました。

その月の二十八日には、みろく殿の上棟祭が行されました。祭典では、三代さまのご先達で神言が奏上され、餅撒^まきが行われ、大勢の参拝者で賑わつたそうです。二

代さまは、『今日はみろく殿の棟上げだな。今頃は餅を撒いているだろうなア』とおつしやつて、やがて床の中で、棟上げの音頭を歌われたそうです。

その三日後、昭和二十七年三月三十一日、二代さまは、安らかに天津御国へとお帰りになりました。急な訃報にみろく殿建設の作業員は工事を中止し、翌四月一日から十日のご葬儀まで、二代さまの奥都城造宮に全員で着手することになりました。

道統を継承された三代教主さまは、『私はひたすらに、教祖たちの残された教えと母の念願のみろく殿を、りっぱに再建したいとねんじております』と機関誌上で発表され、一年後、昭和二十八年四月のみろく大祭に併せて、みろく殿完成奉告祭が執行されました。

それが今、皆さまの目の前に立つ、このみろく殿なのです』

：そんなドラマがあつたのか。

大地は、村野の話に胸が熱くなる思いで、懸魚けいぎょに輝く十曜の神紋を見上げていた。

金竜海

「では皆さま、金竜海の方へ参りましょう」

村野の声に、一同がみろく殿前から金竜海へ向かって歩きだした。

大八洲神社を正面に拝する遙拝所まで来ると、例によつて村野が先達を指名した。

「では、次は…、馬淵さん」

有無を言わせなかつた。丸山は…ナイスチョイス…と思い、小さく拍手をしながら、

大きく頷いた。

「分かりました」

馬淵は遠慮気味に前に出た。

「大八洲神社でのご神号は、大本皇大御神です。では、よろしくお願ひします。はい、

皆さんも、もう少し前に来て

村野の手招きする仕草で一同が何となく整列し、心静かに礼拝を行つた。

「巡拝では、あと二カ所でお参りしますので、馬淵さんよろしくお願ひしますね」

「はい、了解しました」

馬淵が答えた。

指名されたらどうしよう、と思つていた大地は、ホツとした。

「向こうに鎮座しています大八洲神社は、みろくの大神さま、そして厳の御靈、瑞の御靈をお祭りしています。初日の講座の中でもご紹介があつたかと思いますが、大正五年に、聖師さまによつて今の兵庫県高砂沖の神島で“神島開き”が行われ、この世を蔭から守護されていた“坤の金神さま”を綾部にお迎えし、当時の金竜海の大八洲に造営された大八洲神社にお祭りされました。坤の金神さまは、“天のみろくの大神さま”です。

修行を終えられた皆さまは、最後に、この大八洲神社のみろくの大神さまに、み教えを頂いた御礼とみろくの世建設のお手伝いをお誓い申し上げるために、あそこにある…」

村野は左手の方に目をやり、金竜海の舟屋に係留してある小舟を指さした。

「“りゅうぐうまる”に乗つて、お参りさせていただきます。明日は、良いお天気だそ
うですから、渡ることができるでしょう。皆さん日頃のご精進の賜物ですね」
「ありがとうございますなあ～」

丸山がしみじみと言つた。

「さあ、では先へ参りましょう」

村野が歩を進め、また直ぐに立ち止まつて振り返り、両手を横に広げた。

「この金龍海は、大正三年から三年間かけて築造されました。世界の五大州のひな型として造られ、こちらには沓島・冠島神社もあります。この右手の二つの島がそうですね。さあ、どちらが沓島でしようか？ 分かる人」

「えと、確か…、冠島じやない方です」

「そう、冠島じやない方ですね…って、コラ、また丸山さんは…」

笑いが起こつた。

「正解は北側、手前の島が沓島ですね。遥拝所から見ると、手前が冠島で奥が沓島になるわけです。覚えておいてくださいね。」

そうして、沓島・冠島を除く、この金龍海とその周辺で、世界の五大州のひな型になつているわけです。さて、どんなひな型か、言えますか？ はい、今立つているところは…」

「ユーラシア大陸ですか？」

馬淵が答えた。

「はい、そうですね。ここ・金竜海の周辺が、世界で言えばユーラシア大陸。日本で言えば本州の型です」

「あの…」

「はい、何でしようか、雨宮さん」

大地が質問した。

「金竜海は、この大きさなのに、池でもなく堀でもなく、どうして海なのですか？」

「そうですね。普通だつたら、湖やお堀よりも小さいですから、確かに池ですね。でも、お筆先の中にも『此の大本にありたことが、世界には皆でて来るぞよ』とあるように、大本は世界の鏡、型を出す尊い靈的な地場だと示されています。

そして、この金竜海は、聖師さまが高熊山ご修行の折、靈界でご覧になつた信州の皆神山から見た麓の様子を型取り、そのご指示によつて世界の国土の型として作られたのです。ですから、世界の“海の型”でもあるんですね。

実は、大正時代の開掘の時に、実際“金竜池”と呼ぶ信徒もいたそうです。それを耳にされた開祖さまは、

『そんな小さな池ではない、金竜海やがな、この海には八百万の^や^{およろづ}ご竜体の神々さまが

皆お集まりなさるのやから、人間から見たら泥水でも、神界から見たら金の水になつてゐるのや』

と、おつしやつたそうですよ。靈的には、きっと広い海洋なのでしようね。そういう大きな気持ちで、この金龍海をご覧くださいね』

「はい、分かりました」

大地が領いた。

「で、さきほどの大八洲おおやしまが、アフリカ大陸と九州のひな型です。その南側の六合大島くにひろじまが北アメリカ大陸、北海道。そのまた南側、塩釜神社あたりが南アメリカ大陸と台湾に相応します」

「以前から思つていたのですが、塩釜神社は島ではないですよね」

馬淵が訊ねた。

「そうですね、今、塩釜島は陸続きになつていますね。でも実は、事件前の神苑案内図を見る限りでも、やはり、陸続きになつてているんですね。ただ、塩釜神社のところから六合大島くにひろじまへは、”天浮橋”という小さな橋が掛けられていました」

「そうでしたか、分かりました」

馬淵は納得した表情ではなかつたが、小さく頷いた。

村野は、あらためて話を始めた。

「大正三年から始まつた工事は、すべて聖師さまのご指示で進められましたが、金竜海がある場所は、町の高台になつています。ですからいくら掘つても水が出る気配はないわけで、当然、町の人たちからは、あんなところに大きな池を掘つて池の水はどうするんだろうねえ、つてバカにされたんですね」

⋮それはそうだろうなあ。

大地もそう思つた。

「一年掘つても、二年たつても水が出てこないとなると、さすがに池を掘つている信者さんたちも、だんだんと不安になつてきますよね。やる気も薄くなつてくる。

そんな冬のある日のこと、聖師さまが工事を進めるよう指示して出掛けられました。ところがその日の夜、帰苑されてみると、工事が予定通り進んでいなかつた。さあ大変、聖師さまは激怒されました。夜中に老人、婦人までたき起こして、みぞれが降る中、作業をしたことがあつたそうです。とにかく、神命第一だつたわけですね」

村野がしみじみと語つた。

「そうして三年がたち、ようやく五大州の島々がほぼ完成しました。でも、いつこうに水が出る気配はないわけです。ところがです……」

村野の声がひときわ大きくなつた。

「なんとそこへ綾部町から、大本へ申し出が来ました。それは当時、町が整備していた用水路を大本の敷地内に通させてほしい、というものでした。」

こうして、金竜海は、満々と水をたたえることになつたわけです。めでたし、めでたし修行者の中からは、ほおゝ、という声が漏れてきた。大地も初めて聞く話に感激した。
…すごいなあ。

「しかし、そうした苦労の末に出来上がつた立派な金竜海も、それから二十年足らず、昭和十年の第二次大本事件で、無残にも埋め戻され、何と郡設のグラウンドに変わり果ててしましました」

つらい話に、大地は心の中でため息をついた。

「でも、事件後の昭和二十三年元旦から、埋められた金竜海の再掘が始まられ、島々を復元するため、全国から大勢の信者さんたちが食料持参で駆け付け、手に手に道具

を取つて掘り続けました。

そして、全体がおおよそ元に戻り、最後に大八洲神社が完成し、作業開始から三年後、金龍海が復元されました

「めでたし、めでたし」

「もう丸山さん、私のセリフを取らないで」

「失礼…。でも、昔の信者さんたちは本当にすごいですなあ。そのおかげで、こうして今の私たちは、このすがすがしい聖地で、ゆっくりお参りさせていただけるわけです」「ほんとにそうですね」

馬淵も同調した。

「ところが、その復元作業でも、なぜか大和島だけがないまま、半世紀以上がたつていきました。それで現教主さまが、開教百二十年の先駆けの事業として、『玉水の泉』と『大和島』の復元を指示なさいました。そうして、平成十七年の十一月、大本開祖大祭の日に『大和島』が完成し、この桧造りの『みろく橋』の渡り初めが行われました。それはとても感動的なシーンでしたよ」

「そうでしたね」

丸山が言つた。

「では、私たちも渡りましょう」

村野の先導で、全員がみろく橋を渡つた。

「この大和島がオーストラリア大陸、そして四国のひな型です。これで五大州がそろつたわけですね。北原さんは四国の方でしたね」

「はい、徳島です」

北原剛が笑顔で答えた。

「教主さまは後に、『不思議ですね。陸続きだったところに水路を掘つて大和島ができたことで、金竜海の水に、潮のような流れが生まれてきました。これで金竜海が“海”になりました』と述懐されたそうです。やはり、ご神業としてはとても大きな意義があつたのだと思います」

村野の話を聞きながら、大地は足元に目を向け、もう一度地面を踏みしめた。

塩釜おひねり

「この 大和島やまとじまを築造する時に…あれは平成十七年八月末、夏の暑いときでしたが…、三日間で約二百人の信徒が集つて、金竜海の泥上げの献劳作業を行いました。その時に、あの辺りだつたそうですが…」

と村野は、大和島やまとじまの北側の方を指さした。

「作業中の泥の中から三個のきれいな玉が発見されたという出来事があつたんですよ。

ねえ、北原さん」

「そうそう、私もその時の献劳には参加していて見ましたが、いやー、びっくりしました」

北原が思い出したように答え、村野が指で丸く玉の大きさを示しながら話を続けた。
「大きさは大、中、小とあって、どれもまん丸の美しい玉でした。大きいのがきれいな薄桃色の玉。中ぐらいの玉が傷一つない透き通った水晶玉で、小さいのは勾玉模様が入った青みがかった玉でした。

『その玉の由来は分かりませんが、教主さまは、大、中、小の三個の玉が出てきたことは、何か大きな意味があり、神さまから大きな宝をいただいたと、ありがたく思つていま

す』とおっしゃっていました。

「あら、雨宮さん、今、どんな玉か見てみたいなあ、と思つたでしよう」「えつ、はい」

大地は意表を突かれた。

「見てみたいです。どこへ行けば見られますか?」

「残念!」

丸山が口を挟み、今は…、と言つて沓島神社しまと冠島神社おしまを交互に見た。

「あれ、どつちだったかな?」

「どつちでしよう」

村野が答えた。

「何のことですか?」

大地が村野に訊たずねた。

「実は、その年の十一月に三個の玉は、教主さま箱書きの桐箱に納めて、あの冠島神社に安置されたんです。小雨の中での祭典・儀式でしたが、とても厳肅な雰囲気でした。…ということで、残念ながら今はお見せすることができないんです」

「なんだ、そういうことですか。それじゃ仕方ないですね、諦めます」
大地の返答に、村野は笑顔で頷いた。

「では先へ参りましょう」

村野は金竜橋を渡り、全員がその後に続いた。一同が橋を渡りきつた頃合いを見て
村野は、こちらが：、と説明を始めた。

「長命水です。命を長らえる水と書きます。ありがたいお水ですよ。鶴山山麓の湧水で、
その昔、この水の周りの本宮村の村人たちの中には、長生きの人気が多かつたようです。
それは、飲料水や生活用水として利用していたこの泉の水が良いからだと伝えられて
いたのです。それで大正十三年ごろに、長命水と命名されています。

長生きしたい方は、お水のご神徳に浴してお帰りください。どうぞ丸山さんも…」
「長生きしていいのかな？」

また笑いを誘つた。

「さあ、では沓島・冠島神社にお参りさせていただきましょう。北原さん、ご先達を
お願ひします」

「はい」

北原が前に出て先達を務め、一同で天津祝詞を奏上した。

終わつて、村野がすかさず全員に向かつて言つた。

「さて、どちらが沓島でしたか？」

村野と大地の目が合つた。

「手前が沓島です」

大地が自信を持つて答えた。

「はい、ご名答。皆さん、お忘れなきよう。では、お隣へ」

村野は弾むような声で、全員を塩釜神社前まで移動するよう促した。

「こちらが安産のご守護をいただける大本塩釜神社です。ご祭神は、伊邪那岐大神・乙米姫命さまです。

聖師さまが大正十二年に、二十七日を：当初は旧暦でしたが：『塩釜の日』と決められました。それから毎月二十七日に月次祭を執行しています。

かつて、『お産のことなら、どんなことでもかなえてやる』と開祖さまを通して神さまがおっしゃつたと伝えられていて、多くの信徒、また一般の方々もおかげをいただ

いっています」

… そうなのか。

「懷妊したらまず『塩釜おひねり下付願』と共に、塩釜神社に安産のご祈願を申し込みます。併せてお腹帯のご下付もお願いします。お腹帯は教主さまが『八汐路の塩の八百路』の道あけて守らせ給へ塩釜の大神』とご染筆されたサラシ布をご下付願い、それを腹帯に縫い付けて締め、ご守護を願うものです。

一般では懷妊五ヶ月目の戌の日に『帶祝い』を行いますが、大本では五ヶ月目の塩釜神社月次祭の日、つまり一十七日に腹帯をするようにとも示されています。

私も、塩釜おひねりと教主さまご染筆のお腹帯を締めておかげをいただき、無事出

産することができました。皆さんの中にも、おかげをいただかれた方が…」

村野はそう言いながら、修行者を見回した。頷いていた婦人と目が合い、胸の名札で名前を確認して声を掛けた。

「ええ、熊本からお越しの古竹さん、いかがですか」

「はい、私も出産の時にはお世話をになりました」

分割修行で、今期の修行に途中から参加した古竹奈瑞菜が答えた。四十代半ばだろ

うか、細身の女性である。

「私も三人の子供の出産でお世話になりました。お腹帯は長女の時にお下げいただい
て、下二人の息子の時にも使わせていただきました」

「そうですね。二人目以降は、『お腹帯再使用下付願』を申し込んでいただければ、何
回でもお使いいただけますからね」

村野の返答に、東川芳が口を開いた。

「あのー、私はまだ独身ですから、よく分からぬのですが、一度お下げいただいたら、
そのままで使えるのですか？」

「出産後は大切に保管していただき、二人目からもお使いいただけます。ただ、生ま
れてくる子供は違うわけですから、あらためて教主さまにお許しいただき、ご神前で
ご奉告してご守護を願うために、再使用下付という手続きがとられていてます」

「あー、なるほど、そういうことですね」

東川は納得した表情で頷いた。

「特に初めての出産のときには誰もが不安ですから、塩釜さまのおひねりさんをいた
だけるのは、心強かつたですね」

塩釜さまのしおがまおひねりさんをいた

「おひねりさん…？」

古竹の話に、東川が首をひねった。その様子を見て、村野が口を開いた。

「東川さんはこれから体験されるでしょうから、ちょっとと説明しますね。

『おひねり』というのには、教主さまがご祈願してご神名：神さまのお名前をお書きになつた和紙を細く切り、それを折りたたんでひねり小さな粒状に丸められたものです。で、『おひねり』には、『病氣おひねり』と『しおがま塩釜おひねり』の二種類があります。どちらも信仰的な感謝と畏敬の念を持つて、ご神水と一緒にいただくもので、体の中からも神さまのお力とご守護を頂戴することができます。

『病氣おひねり』は、二体入っていますが、薬のように気安くいただくものではなく、よほどどの病氣の時か、まさかの場合にのみいただくものなのですね。

そして『塩釜おひねり』は、一包に三体入つていて、まず、懷妊したと分かつた時に一体、胎児・母胎共に丈夫で、月満ちて無事安産できるように祈念していただきます。

二体目は、産気づいた時に、いよいよ安産のご守護をお祈りしていただきます。

三体目は、産後に母子共に健康で母乳もよく出るようにお願いしていただきます。

古竹さんもそうされたと思いますが…」

「はい、そのようにしました。あの…、笑い話なのですが、私、ご下付いただくときに勘違いしたことがありました」

「どういど？」

村野が訊いた。

『塩釜おひねり』は三体必要だと聞いたもので、私は三つご下付いただかないといけないと勘違いしていたんですよ」

「えつ、あ、一つに三体入っているということをご存じなかつた、ということですね」

「そうなんです。三体だから、三つ必要だと…」

「それは説明不足で失礼しましたね」

「いえ、そこから思ったことですが、なぜおひねりさんは、"体"と数えるんですか？」

古竹が村野に訊いた。

「するどい質問ですね。実は以前にも同じような質問を受けたことがあるんです。『おひねり』は、確かに形の上では粒状ですから、一粒とか、一つとか呼んでもいいようにはいますが、慣例で"体"と数えています。それに、信仰的につとめでもあります。守護の大きさや権威を考えると、一粒、一粒というのでは軽い感じがしますしね。

物の数え方を助数詞といいますが、一般では、『体』の助数詞は、主に仏像や彫刻像などに使われるようです。そう考えると粒状のおひねりに『体』を使うのは、適切ではないかもしませんね。

ただ、『神』の助数詞も『体』ということなので、そこからきているのかも。ほら、拝む対象を『ご神体』と言うでしょ。大本でも、ご神体は『体』で数えています。おひねりも、信仰的にはご神体に準ずるような扱いだからかもしませんね』

「なるほど」

「それで、教典の中にこのことに関するお示しがないか、調べてみました。

すると『靈界物語』の第三十七巻の中についたんです。三十七巻は、聖師さまの自伝が綴られていますが、その第二十四章『神助』というところで、『教祖様から頂いたおひねり二体を口に含ませ：』という記述がありました。聖師さまが当初から開祖さまのおひねりを『体』で数えておられたんですね。

それで私自身は、靈界物語にあるんだから、おひねりは『体』で数えていいんだ：と納得しました。いかがでしょうか、古竹さん』

「そうなんですね、よく分かりました。ありがとうございました」

「ほ、なるほど。いやあ、ありがとうございました」

何度も小刻みに頷きながら聞いていた丸山が、大きな声を発した。

木の花庵

「さあ、それでは奥へ進みましょ。と言つても、すぐそこに見えていりますけど……」

村野の声で、しおがま 塩釜神社右手へ歩を進める。小さな石橋を渡ると、辺りの空気が少し
変わったような気がした。

「昔こけむした庭と古い民家……なんとも雰囲気がありますね」

大地が言つた。

「雨宮君、これが道中話していた“木の花庵”だよ」

丸山が耳打ちした。

「ああ、これですか。確か、三代教主さまが持ち主から譲り受けて移築された家でしたよね」

「そろそろ、かやぶ 茅葺きの外觀が見事だろう」

丸山が自慢げに言つた。

入口手前で村野が説明を始めた。

「昭和四十四年のことです。地元の京都新聞に“重文級民家が取り壊される”という

記事が掲載されました。それは、江戸中期の典型的な農家形式の建物で、当時で築三百ほど貴重な民俗資料ともいえるものでした。

今日、亀岡から車でお越しになつた方は通つて来られたと思いますが、今の京丹波町質志しづしという所にあつたものです。

岡花金五郎さんおかばなという方が所有されていていたのですが、傷みがひどく個人ではとても維持できなくなり、取り壊しを決めたとの内容でした。

記事をご覧になつた三代教主さまは、三日後に現地を訪ねられました。そして持ち主に『私が住んでおつた家によう似とつてやし、欲しいなあ』とおつしやつたそうです』

この三代教主さまのお気持ちを受け、教団と岡花家の間で話し合いが進められ、無償で譲り受ける代わりに、移築や復元に伴う費用は大本側が負担することになつたのである。

「こうしてめでたく復元保存することになりました。でも、当初は亀岡・天恩郷の今木の花平辺りに移築の予定だつたのですが、建築法の関係で亀岡には建てることができなかつたそうです。それで、ここ金竜海東側に移築復元されることになりました」「移築するのに、かなり時間がかかつたんじゃないですか?」

馬淵が訊いた。

「解体開始から復元完成までは、約二年かかったそうですよ」

「二年！ やはり大変な作業だつたんでしようね」

「そうですね。当時としては一大プロジェクトだつたのではないでしようか。

二年の歳月をかけて移築され、昭和四十七年の五月に復元完成し、三代教主さまが“木の花庵”とご命名になりました。合わせて進めていた申請が認可され、完成の十日後くらいには“旧岡花家住宅”として、国の重要文化財に指定されました。

なんと皆さん、京都府下では、重要文化財に指定されている民家は、あの有名な京都都市内の冷泉家ほか、全部で十四軒ありますが、その中で木の花庵が、農家としては府下第一号の指定になつたのですよ」

「農家としてはかなり大きいものじゃないですか？」

丸山が訊いた。

「そうなんです。こんな大きな入り母屋造り茅葺きですから、十七世紀当時としては、相当の財力を持つた農家だつたようです。さあ皆さん、どうぞ中へお入りになつて、靴を脱いでお上がりください」

薄暗い屋内に入ると、土間の向こうの囲炉裏からたき火の煙が立ち上がり、雰囲気を一層引き立てている。まきの素朴な香りも、どこか懐かしさを誘つているようだ。

大地らは村野の案内で、囲炉裏の左手の間に入つて、床に掛けてあるお軸に一礼したあと、畳に座つて西側の庭に目を向けた。

「ここからの景色もまたステキですね」

東川芳が感激した表情でつぶやいた。

「三代さまのご意向を受けて、お茶室として使われるようになり、今も時折、野だての立札席と併用して、お茶席として使つてているんですよ。夜間には、あんどんをともして、幻想的な茶室として使うこともあります。毎年三月末に開催している高校生講座に参加した高校生が、とても良い感想を残していましたね……」

そう言つて村野は感想文の内容を紹介した。

“木の花庵でのお茶室入席で、あらためて日本の伝統文化、自然の良さを感じました。雨の中、木の花庵からお庭を拝見したときは、感動で涙が出そうになり、日本人に生まれた幸せを感じました”

：日本人に生まれた幸せか——、なんと感性の鋭い高校生なんだろう。でも、ここ

にいるど、その気持ちがちょっと分かる気がするなあ…。
大地はあらためて苔むした庭に目をやつた。

「はい皆さん、お名残惜しいでしようが、こちらへどうぞ。少し休憩しましょ」
村野が囲炉裏端へ誘つた。

「今は真夏で暑いですから、火のそばは敬遠されるでしょうが、冬場の神苑案内だと、
この火もありがたうい“ご馳走”になるんですよ」

「そうそう、前回、冬場に来た時は、この囲炉裏の火が、ありがたかったなあ～」
「そうでしたね、丸山さん」

「あの時は、この囲炉裏で焼き芋をごちそうになつたけどね…」

丸山が口元を手でぬぐうしぐさをした。

「ごめんなさい、夏場はちょっとね」

「いえいえ、催促したわけではないですから…」

丸山が笑顔で言つた。

「皆さま、念のために言つておきますが、このたき火は、焼き芋のためにたいている

のではないのですよ」

「え、そうなんですか？」

「もう、丸山さん、知つているくせに」

また笑いが起つた。

「かつての日本…、茅葺き屋根の家屋内では、こうして火をたいて囲炉裏で暖をとり、かまどで煮炊きする生活をしていました。すると日々立ち上る煙が家屋の耐久性向上に、とても良い役割を果たしていたのです。煙の成分が茅や木材をコーティングして、防菌や防虫、それから腐敗に対しても優れた効果があつたのです。ほら、上を見てください。煤で黒光りしているでしょ」

「ほんとですね」

東川が天井を見上げながら言つた。

「薰蒸保護ということですね。でも、木の花庵のような文化財で、普段人が住まず何もしなかつたら、当然たき火効果はなく、家屋の耐久年数が極端に短くなるそうです。だから、このたき火は、木の花庵を護るとても大切なご用なんです」

「なるほど、そういうことなのですね」

大地は村野の説明に頷き、あらためて重厚な梁や天井を見回した。

「こうした日本の古い伝統的な建造物や文化を後世に残すことは、大本の大切なご用だと思ひます。そのことは大本のみ教えに根ざした三代教主さまの深いみ心によるものです。

先ほどお話しした高校生の感想のように、日本の良さを口で説明するよりも、実際に昔の日本人の生活や環境の一端にじかに触ることによって、より日本人としての感性を呼び起こすことができるのだと思ひます。

私たちは、三代さまのみ心と残していただきたいご功績に感謝しないといけません。ね、丸山さん！」

「はっ、その通りでございます」

今度は丸山も神妙な顔で相槌づちを打つた。

「三代さまは、『日本の国を、美しい自然のままの日本の國らしい国にさしていただくことが、この国土に生を受けた民族の使命です』とおつしやっています。ということは、私たち大本信徒の使命でもあるのだと思うのです」

村野はそう言つて、以下の三代教主さまのお示しをかみ砕いて説明した。

『日本人の生き方、そこに求められる道徳や礼儀作法は、やはり、日本特有の自然風土がもつ性格を媒介として生まれてきたものであるとおもいます。

日本の山、日本の野、日本の川そこに生きるもろもろが、こまやかな四季のつながりとともににある姿、そこみる万象の美しさが、わたくしたちの衣服に、調度品に日用の雑器にも、密接につながって日本的なものを生みだしたように、道徳や礼儀作法も、日本的なこころをもって育てられてきました。

近頃、日本の山野が荒れるにしたがって、日本人の道徳や礼儀も荒れてしまいました。なかにか日本の誇りが地に落ちてゆくようにおもわれ嘆かれてなりません』

木の花庵では、"庵"の歴史の重みと醸し出す素朴な空気感によって、誰もがほっこりと落ち着いた雰囲気に包まれる。

特に大道場修行者らは、四日間、聖地の靈氣に浸り、神さまのみ教えに接しているだけに、村野の言葉が、砂地に水が染み込むように、素直に響いてくる。時折笑いを誘う話題も飛び出し、大地たちは、しばし和やかなひとときを過ごした。

その後一同は、修行者のみが特別に許されている茶室・鶴山居の庭の見学を行い、続いて緑寿館に参拝（現在は最終日に実施）。

ここでは、尊師さまがご昇天までお過ごしなつたお部屋を拝見するなど、大地にとつても初体験の連続で、あつという間の一時間だった。

「丸山さん、綾部の神苑案内は、いろいろと盛りだくさんですね」

「だろう。『村野節』も最高だしね。ほかにも何人かの講師がいるけど、それぞれに個性的で、毎回楽しみなんだよ」

「そうなんですね」

♪ドーン、ドーン、ドーン！

長生殿への参道を登っていくと、夕拜の始まりを告げる報鼓の音が聞こえてきた。

天国に貯金

大地たちはつくばいで手と口を浄めた後、龜の間入り口から長生殿に入った。夕拝には、大地たち修行者その他に、数人の本部職員や参拝者の姿があつた。

大地にとつて長生殿で参拝するのは、五年前の節分大祭と昨年のみろく大祭に続いて三度目であつた。最初に節分大祭に参拝した時には、まさか修行者として長生殿に参拝することになるとは夢にも思つていなかつた。それに、少人数で平日の夕拝に参拝するのは、大勢の大祭参拝者の中でお参りするのとは違い、心穏やかな気分なのが自分でも不思議であつた。

：修行も四日目だからかな？

大地は思つた。確かに自分の気持ちが初日とは何となく変わってきており、綾部に来てからは、そのことをより強く意識していた。やはり天国に相応する聖地・梅松苑の持つ靈氣、雰囲気のなす技のように思えた。

長生殿での夕拝を終え、大地たちは参道を北へ下り、みろく殿へ向かつた。

「今日はだいぶ歩いたね」

丸山が言つた。

「そうですね、大丈夫ですか、丸山さん」

「なに、まだまだ大丈夫：と思っているけどね。それに修行で綾部に来て長生殿に参拝すると、いつも気分が良く、元氣をいただくからね」

「はい、僕もそう思つていたところです」

「さあ、長生殿からみろく殿まで距離があるから、急がないとね」

「丸山さん、みろく殿の夕拝つて、時間は決まつているんですか？」

「さあ、どうだろう。いつも大方の参拝者がそろえば始まるという感じかな」

「そうなんですね」

大地たちは、たわいない会話をしながらみろく殿前に着き、正面玄関のすのこに上がり下足をそろえた。

「この階段を見ると、思い出す話があるんだよ」

丸山がポツリと言つた。

「えつ、何ですか？」

「あく、もう夕拝が始まるから、また後で教えてあげるよ」

「はい、分かりました」

大地は残念そうに答えた。

みろく殿の夕拝では、中央の大神さまに天津祝詞を奏上。続いてご神前右の祖靈社で祖靈拝詞、左手の万靈社では万靈拝詞で、それぞれ礼拝を行う。終わると午後六時を回っていた。

「おなかすいたなあ！」

思わず口をついて出た。

「私もよ、雨宮君」

みろく殿玄関ですぐそばにいた東川芳かおるが相槌あいづちを打った。

「ですよね。さあ、これから僕の副守護神を満足させないとね」

「うううう」

「綾部の食堂は初めてだし、楽しみだなあ」

「うううう、きつとおいしいよ」

大地は修行・参拝者の流れに付いて松香館の食堂へ入った。

手を洗い、おかげをお盆に取り、所定の位置でご飯、味噌汁をよそつた。

「雨宮君、そのテーブルにある副菜も、好きに取つたらいいからね」

丸山が誘つた。

「ビュッフェスタイルで、いろいろありますね。どうしてこんなにあるんですか？亀

岡ではなかつたですよね」

「雨宮君がおなかをすかしているだろうから、たくさん準備してくださつたんだよ」

丸山が真顔で言つた。

「ほんとですか？」

「ハハハ、そんなわけないだろう」

「もう、丸山さん」

「綾部は毎日祭典があるから、当然お下がりも多い。それを食堂の人があくまで上手に料理して出してください。そうだよ。ありがたいね」

「なるほど、そういうことですか。たくさんあつてうれしいですね。尾頭つきの鯛の塩焼きまでありますね。おいしそう」

大地は好みの惣菜を、取り皿いっぱいに盛つた。

大地ら修行者は、同じテーブルに集まつて席に着き、合掌して一代さまの三首のお歌を拝誦した。

「いただきます」

大地は、食作法で習つた作法を意識しながら箸を進めた。どれもおいしく、自然と笑顔になり、会話も弾んだ。

大地が、ふと思い出した。

「そういえば丸山さん、さつきみろく殿前でおつしやつていた話つて、何ですか？」

「おう、そうだつたね」

丸山も思い出したように言つた。

「これはね、私の大先輩から聞いた話だけど、本当におもしろいというか、不思議な話なんだよ。ほら、今日の神苑案内で、村野さんが、みろく殿建設の歴史を話してくれたでしょ。実は、それにまつわる献金の話なんだけど…」

そう言いながら、丸山はご神徳談を紹介した。

みろく殿の建設が始まつたのは、戦後の物資不足の時代であつた。大本信徒の多くも、その日の生活に懸命だったころである。その上、昭和二十五年の年末には、教団は赤

字決算が見込まれていた。そのため当時の教団執行部は、二代教主さまのみろく殿建設のご発意を受けても、すぐに腰を上げなかつた。

「もつとはげみなはれ！」

その後、二代さまの強烈なお言葉から、その熱いご希望を知つた信徒たちの気持ちが一つになり、一気にみろく殿建設のご用が盛り上がりを見せるようになつた。それが二代さまご昇天の数カ月前、昭和二十六年の末のことであつた。

その熱意が地方へも伝わり、みろく殿建設のための献金のご用が、全国的に始まつた。これを受け、ある機関でも管内の信徒に献金のお願いがなされ、その機関では、「一日十円で月三百円」という具体的な金額を呼び掛けた。信徒は皆、苦しい生活の中であつたが、神さまの大切なご用だと、積極的に取り組むことになつた。しかし、

「わしはできん！」

「うちは無理だ」

そう言つて献金のご用に参加しなかつた信徒が三人だけあつた。

献金の機会は人為的なものではない。ご神意であり、巡り来る神機である。本人がご神業としてお仕えする気持ちが何より大切であるから、機関役員も無理強いをしなかつた。その三人は結局、献金のご用にはお仕えしなかつたのである。

昭和二十八年四月、みろく殿が見事に完成した。全国から晴れの慶事を祝うため、大勢の信徒が次々に梅松苑に集つた。

参綾する団体も多く、この機関でも団体参拝者を募り、綾部に向かつた。その中には、くだんの三人の姿もあつた。

綾部に着き、一行は青空にそびえるみろく殿の雄姿を見上げた。

「…ということで、団体参拝を引率した私の大先輩の玉津さんが、みんなと一緒にみろく殿の階段を上がるこうとした、その時だよ」

丸山の口調が強くなつた。

「正面玄関の階段ですね」

「そう、あの階段を上がるこうとした時に、階段の手前で立ち止まつて、もがいてるような人がいたんだ。しかも三人。玉津さんが何をしているんだろうと思つて尋ねると、足が言うことを聞かず、前に動かなくなつてているというんだね」

「えつ、どういうことですか？」

「足が固まつているような状態で、玉津さんは、その三人の顔を見て、すぐに理由が分かつたそうだ。ハハー、献金しなかつたからだ」と。」

「エ～ツ、献金しなかつたからですか。神さまは、厳しいなあ」

「いやいや、雨宮君、神さまじゃないよ。神さまはそんな小さいことはされない。玉津さんが言うにはね、”丸山君、祖靈さんが入殿することを止められたのや、先祖として恥ずかしい、とね”。この話を聞いて、私もびっくりしたよ」

「で、その三人はどうしたんですか？」

「玉津さんは三人に、自分が感じたままのこと話をしたそうだよ。で、三人はその場で、神さまと祖靈さまにおわびし、”遅くなりましたが、これから少しづつ献金させていただきます”と反省し、今後のことを誓つたそうだね。すると三人の足が一斉に動くようになつて、無事に階段を上がり、参拝することができたそうだよ」

「エ～、ホントの話ですか？」

「そう、玉津さんは、”丸山君、ホントなんやで。不思議やろ。祖靈さんからしたら、どうして献金してくれなかつたんだ、という残念な気持ちだつたんだね。だから子孫が祖靈さんに恥をかかすようなことをしたらいいかんのやなあ”と、しみじみ言つておられたんだ」

「怖い話ですね」

「献金のご用は、現界での現実的なご神業のお役に立てるということだけでなく、靈界にも響く大切なご用ということだね。よく“天国に貯金する”と言われるけど、まったくそういうことなんだよ」

「いやいや、ビックリだな」

「そんな話、初めて聞きました」

「“天国に貯金”って良い言葉ですね」

近くの席に座っていた北原剛、馬淵光彦、梯洋子かげはしと古竹奈瑞菜なぎならも、丸山の話に聞き入り、異口同音に驚きの声を発した。

「丸山さん、僕は献金したことないんですけど…」

大地が言つた。

「あの、私もです」

東川も同じであつた。

「またそのうちに機会があるよ。そのときは、しつかりご用してください。雨宮君は梅木家のことだから、おじいさんかお母さんが、君の名前で献金もしているんじやないかな」

「そうかなあ？ 一度訊いてみます。丸山さん、スゴイお話を、ありがとうございます」といいました

した

「さあ、夜の講座があるから、そろそろ行きますか。では、ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

全員そろって手を合わせ、二拍手した。

和みの輪ができたような、楽しい夕餉のひとときとなつた。

大道場修行四日目、午後七時から松香館二階の講座室で、夜間の講座「みたままつり」が始まった。この講座は、家々の祖靈祭祀について学ぶ時間である。

祖靈祭祀とは、その文字のごとく、祖靈：つまり各家の先祖の御靈みたまを、祭祀：まつることであり、大本では「祖靈祭祀」と書いて、「みたままつり」とも呼称している。家ごとに神とみたまを祭らねば

この世のもつれはとくる日のなき

と二代教主さまが詠まれているように、大本の靈界觀による「みたままつり」は、子孫にとつて全くとのできない大切な務めと示されている。

しかし物質中心に傾く現代、目に見えない靈界との関わりがなおざりになつていてる家庭も多く、そのことがひいては家々が抱える諸問題の原因の一つになつていてるともいえるのではなかろうか。

さらに大本では、祖靈祭祀さいしの道が途絶えた御靈みたま、戦争や飢餓、病気、不慮の災害や事件・事故などで亡くなつた世界中の人々の靈魂を救い上げ、丁重におまつりする道が示され、日々祭祀さいしが厳修されている。

「皆さんには今日、みろく殿にお参りされたのでお分かりかと思いますが、殿内中央には大神さまをお祭りし、向かつて右に祖靈社、左に万靈社がありますね」

講師の下川宙^{ひろし}が説明した。

「二代教主さまは昭和二十五年一月十九日、聖師さまの二年祭の日から、天王平の今は新靈社と呼ばれている当時の斎納社^{さいのうしゃ}で、救われていない万靈^{ばんれい}をおまつりなさいました。その時に、次の二首の歌をお詠みになっています。」

ありがたや幾萬年^{いくまんねん}をくるしめる

みたまらすくひの舟に乗るなり

靈界にくるしむみたまを世にあげて

いつきまつるぞうれしかりけり

そうした世に落ちて苦しんでいる万靈^{ばんれい}は、今、みろく殿の万靈社^{ばんれいしゃ}でおまつりされています

います」

下川は種々解説した後、「修行のしおり」にある以下のお示しを読み上げた。

このたびの万靈社^{ばんれいしゃ}のご用は、昭和二十五年から二代教主さまが靈界で苦しむみ靈^{たま}や

世界中の「おちしみたまたち」を救われた万靈祭ばんれいさい祀しを継承した、大本ならではの大きな救いのご用でございます。今後継続して毎日のお給仕、朝夕拝が行われ、毎日の祖靈社例祭に引き続いての礼拝、月次祭、春秋の慰靈大祭が丁重に執行されることになつております。皆さまには祖靈さま同様にまごころこめてお参りいただきましたら嬉しく思います。

まことに厳しい、乱れた、騒々しい、不安定な世の中ですが、これらの救いのご用を通してもつれた糸が少しづつほぐれていきますように、人の心が穏やかになり、人と人、国と国の関係もよりよくなりますようにと、心より祈念しております。（平成二十一年 教主さま「みろく大祭ごあいさつ」）

「みろく殿では毎日午後一時から、例祭が行わされているのですから、みたまにとつてはこんなありがたいことはないわけです。

例祭のほかにも、みろく殿では毎年大切な慰靈祭が六回行われています。それは…」と、以下の慰靈祭を紹介した。

六月二十三日 第二次世界大戦沖縄戦全戦没者慰靈祭

八月六日 広島原爆犠牲者慰靈祭

八月九日 長崎原爆犠牲者慰靈祭

八月十五日 第二次世界大戦万国犠牲者慰靈祭

九月十一日 世界平和万靈慰靈祭

「この六回のおまつりも大変重要な慰靈祭です。こうして日々の例祭、慰靈祭で靈界が救われることによつて現界も救われ、多くのみたまさま方も喜び勇んで、共に地上天国建設というご神業にご参加いただけます。そうして靈界、現界が一つになつてご利用にお仕えさせていただくことが、私たちの大きな使命だと確信しております」

下川は、大本の祖靈祭祀さいしの概要を説いた。

「ところで話は変わりますが、皆さまは冠婚葬祭というと何を思い出されますか？」

：冠婚葬祭といったら、結婚式と葬式だよな。

大地は心の中でつぶやいた。

「東川さん、いかがですか？」

下川が後列の席に座っていた東川芳かおるを指名した。

「えつ、はい、結婚式とお葬式だと思いますが…」「はい、期待通りの答えをありがとうございます」

「…じゃあ、違うのか？」

大地は手を挙げなくて良かつたと内心ホッとした。

「あつ、丸山さんは答こたへえなくていいですかね」

正解を言おうとしていた丸山の機先を制した。

「あら残念」

またみんなの笑いを誘つた。

「人生にはいろいろな節目があり、日本人は古来、節目を大事にしてきた民族です。人生の節目、季節の節目、時代の節目などがあり、それが各地のさまざまな風習や年中行事などにもつながっています。

もつとも、神さまの目から見たら、良うしおとらの金神の調伏行事として受け継がれてきた悪しき風習もありますが…。

ともかく、節目を大切にしてきた日本人一人一人の人生の中で、最も大切な節目を

表すのが冠婚葬祭です。ところが世のほとんどの冠婚葬祭場と称すものは、さきほど東川さんがおつしやつたように、結婚式と葬式を行う所のように思われていますから、本来の意味と違うように受け取っている方も多いのだと思います。

実は、冠婚葬祭というのは人生の重要な四つの節目の儀式を表しているのです」

：四つなのか？

大地は驚いた。

「つまり、漢字一文字ずつがそれぞれ節目の儀礼を表しているんですね。冠婚葬祭の二つ目の“婚”が婚礼で、三つ目の“葬”が葬祭、お葬式です。

で、最初の“冠”が古来の元服、今で言う成人式です。元服とは、数え年十二歳から十六歳の男子が、氏神さまの前で大人と同じ髪型を結つて、冠かんむりを着けてもらつていました。それが“冠”的由来だといわれています。

今では“冠”は成人式だけでなく、初節句や七五三、入学や卒業、就職などのライフイベントを含む祝い事とされることもあるようですが、本来は元服、成人式を指しています。

そして最後の“祭”。これが実は“祖靈祭祀”、つまり先祖をまつる“みたままつり”

なのです。仏教では、法事やお盆などを指すようですが、大本で言う葬祭後の節目節
目のみまつり、毎十日祭や五十日合祀祭、年祭、慰靈祭に当たるものですね』

…へえー、知らなかつたなあ。

大地は感心した。

「冠婚葬祭の“冠婚”は現界的なことであり、“葬祭”は現界と靈界双方のことですよね。
また“冠婚”は自分自身で行うこともできますが、“葬祭”は子孫に行つてもらうもの
ですね。

そう考えると、昔の人々は、この世に肉体を持つて生きている間も靈魂になつてか
らも、一続きの人生の節目として大切にしていたのではないでしょうか?』

…なるほどなあ。

大地は心の中で頷いた。

その後、下川は大本のみたままつりの基本である祖靈社への「復祭」や「合祀祭」など、
その種類や手続きについての概略を説明した。

大地は五年前、初めて節分大祭に参拝した後、祖父の梅木松太郎に連れられ、みろ
く殿に年祭の申し込みをしに来たときのことを思い出していた。

…そういえばあの時、おじいちゃんから、大本のみたままつりのことを詳しく聞いたことがあつたな。そうだ、確か僕の妹の二十年祭をお願いしたんだつけ。ん？

ということは…、今年は二十五年の節目になるはずだよな。

大地の脳裏に、流産児であつた妹・雨宮香のことがよぎつた。

講座が一応終わり、下川が「では、何か質問があればお受けします」と投げ掛けると、次々に質問が飛び出し、祖靈祭祀への関心度の高さがうかがえた。

靈界の祖靈の向上が、現界の子孫の繁栄に直結していることを聞いた後だからだろうか、質問する人は、皆一様に真剣で、内容も具体的である。大地も手を挙げた。

「はい、雨宮さんどうぞ」

下川が指名した。

「あの、流産児だつた私の妹が今年でたぶん二十五年になると思うんですけど、やはり年祭をしないといけないのでしょうか？ 確か三月だつたと思いますので、もう命日は過ぎています。祖父がお願いしているかもしれませんが…」

「二十五年祭は、しなければいけないということはありません。靈界のご先祖さまに

とつては喜ばしいことですから、もちろん毎年行つても差し支えありません。

年祭の執行は基本的に、亡くなつて五年までは毎年行います。以降は五年、十年、十五年、二十年と五年ごと。そして、二十年祭以降は、三十年、四十年、五十年と十年ごとになります。五十年の次は百年です」

「良かった。ではあと五年後ですね」

大地は安心した。

「雨宮さんのおじいさまは、綾部の梅木さんでしたよね。だつたら大丈夫。梅木さんならぬかりはありませんよ。確か先日、百五十年祭もされていましたからね」「えへ、百五十年祭ですか」

大地は驚きながらも、『さすがおじいちゃん!』と心の中でつぶやいた。

修行修了奉告

「修行・参拝の皆さま、おはようございます。すがすがしい聖地の朝がやつてまいりました。洗面が終わりましたら、各自のお部屋、廊下、お手洗いの清掃をお願いします」
亀岡での宿舎・安生館と同じように、綾部の松香館でも、起床の音声が流れてきた。
そのバックには、能楽の笛と小鼓こづみの音が響く。五日間の大道場修行で毎朝、いや応
なしに耳に入ってきた音である。

大地は最初、聞き慣れない音楽に違和感を持つたが、毎日聞いていると、心地良く
感じるようになつたのも不思議であつた。というのも普段は早起きが苦手の大地だつ
たが、修行の間はすんなり床を離れることができたからだ。この朝も爽やかに目覚め、
洗面と清掃を済ませた。

スピーカーからの音は、能楽の囃子はやしから愛善歌の合唱になつた。「瑞声」など数曲が
流れ、聞き終わつたころに松香館二階から玄関に下りた。すでに数人の修行者がそろつ
ていた。

大地は丸山と連れだつて長生殿の朝拝に向かつた。

「丸山さん、あの起床の音楽は、何ですか？」

「あれねえ、雨宮君は好きかい？」

「好き嫌いはともかく、目が覚めますよね」

「まあ、そうだね。いつだつたか一緒に修行した人に訊ねたことがあつたけど、眠たいのに起こされるからキライ！ って言う青年もいたし、あの音源が欲しい！」と言ふ年配の女性もいたなあ」

「そうなんですか」

「以前、雨宮君のように、あの音楽が何なのか訊かれたことがあつて、その時は知らなかつたので、本部で音源を制作した人をつかまえて訊いたことがあるんだ」

「そうでしたか」

「あれは能楽の『翁』という曲で、その中でも『二番叟』というものだそうだよ」

「おきな？ さんばそう？」

「翁は能にして能にあらず」とか言われていて、神事のようなものらしいね。だから、謡の文句も今の言語とは違う言葉のようだね。で、通常の能では小鼓は一人だけど、翁のときには三人で打つんだよ。だから、起床のテープでも小鼓の音や掛け声が複数聞こえてくるんだ」

「そうだったんですね」

「そしてもう一つ、あの起床の曲は、平成四年に長生殿が完成した翌年の五月、長生殿能舞台の舞台^{びら}披きで奉納されたものだということだね」

「あの老松殿から見える野外舞台ですよね」

「そうだよ」

「じゃあ、大本にとつてはとてもおめでたい時の曲じゃないですか」

「ということだね」

「あの笛と小鼓は、プロの方ですか？」

「そうだよ。私も舞台^{びら}披きの時に拝見したけど、良かつたなあ。何とも言えない幽玄の世界に浸れて、とつても感激したこと憶えて^{おぼ}いるね。あの小鼓は、後に人間国宝に認定された京都の曾和博朗先生親子三代で打たれているから、貴重なものなんだよ」

「そういう曲だったんですね。もつと早くいわれを聞いていたらよかつたなあ」

「そうか、今朝で最後だからね。雨宮君、またいつか修行に来たらいいよ」

「アハハ、そうですね」

長生殿、みろく殿での朝拜が終わり、大地たちが食堂に入るころ、小雨が降りだしてきた。朝食の席では、この雨がやむかぢうか心配する修行者もいたが、丸山は「お舟に乗るころにはきっとやみます!」と妙な自信を見せていた。

午前八時からは、「うぶごえ淨写」の時間。修行者は墨をすりながら“鎮魂”し、三代教主さまがお書きになつた「うぶごえのご染筆」を半紙の下に敷き、心静かになぞりつつ、神さまのみ声をいただくのである。

大地は墨をするのも久しぶりで、心地良い緊張感があつた。隣を見ると、丸山は慣れた手つきで墨をすつてゐる。

…さすが丸山さん。

一昨日だったか本人の話によると、丸山は日課のように『おほもとしんゆ』の淨書をしているとのことだつた。

…やつぱ、実践している人は違うな。

大地も心を鎮め、半紙に筆を下ろした。

「うぶごえ淨写」が終わると、一同は用意されたワゴン車に乗つて、天王平へ向かつた。

前回、奥都城に参拝したのは、去年の五月、みろく大祭の時だつた。奥都城祭典に参拝するシャトルバスの中で、一帯の呼称である天王平や彩霞苑の名前の意味や“おくつき”の漢字表記の違いなど、祖父・松太郎から詳しく教えてもらつたことを思い出していた。(第62・63回参照)

その折は祭典前に時間があつたので、初めて梅木家の墓に参拝した。“お墓は亡くなつた人の魂とのつながりを確認できる場所”と感じたのもその時だつた。

「はい、到着しました」

村野の案内で、最奥天国に相応する「奥都城」に参拝。おしえみ教御祖おやさま方に修行の御礼を申し上げた。

お参りを終え、辺りを見回した大地は、風に揺れる松の緑が、ことさら輝いているように感じた。

引き続いて長生殿で、修行の修了奉告が行われ、全日程を終えた一同が修了証を拝受した。皆、緊張の面持ちの中にも、一様に安堵感あんどのと充実感で満ちているようであつた。「皆さま、五日間ご苦労さまでございました。そして、おめでとうございます」

村野が祝福した。

「ありがとうございます」

丸山がひときわ大きな声で答えて、また場が和み、全員が笑顔になった。

「なんだか、うれしいですね」

大地が丸山に声を掛けた。

「そう、この瞬間は何度体験してもうれしいもんだよ」

「では皆さん、これからお舟に乗りりますので、金竜海までご移動ください」

「まだ雨が降っていますかねえ？」

東川芳^{かおる}が心配そうに言つた。

「まだ降つてゐるみたいですね。まあ、でも……」

村野は意味ありげに笑顔で言葉を濁した。

一同は、亀の間玄関から外へ出て金竜海畔へ向かつた。すると、みろく殿前広場までさしかかった時、傘に落ちる雨の音が小さくなつてきた。

「あれ、丸山さん、小降りになつてきましたよ」

大地は思わず大きな声で言つた。

「やつぱりね」

「えつ、どういうことですか？」

「いやね、以前も同じようなことがあつたんだよ。二年前だつたかな、暮れに修行を受けてことがあつたんだけどね。その時は、最終日は朝からシンシンと雪が降つていたんだ。でね、この場所まで来るとね、それまで舞つっていた雪がやみかけたんだよ。それでお舟に乗ることができて、いざ出発となつたら空が明るくなつて、金竜海を渡るころにはパア～ッと青空が見えて、なんと太陽が顔をのぞかせたんだよ」

「え～、スゴイ！ 何とドラマチックな演出ですね」

「だろう、もう感激で胸がいっぱいになつたんだよ」

「……って、丸山さん、本当に雨が上がりましたよ」
大地が驚いた表情で空を見ながら言つた。

丸山がニヤリと白い歯を見せた。

「皆さまの日頃の行いが良いのでしょうかね。今日はお清めの雨をいただきおりまして大八洲神社に参拝させていただきます」

金龍海舟着き場の横で、村野が案内した。

：何だかドキドキするなあ。

大地はそう思いながら乗舟した。

係の職員が舟の舳先へさきに座り、もう一人が竿さおを操あやつり、りゅうぐう丸はゆつくりと離岸した。

「では、ご一緒に天津祝詞を奏上させていただきます」

先達に合わせ、一同心静かに天津祝詞を奏上。りゅうぐう丸は水面を滑るように進んでいった。しばらくすると、眼めを閉じてご神号を奏上する大地のまぶたが、急に明るくなつた。

：あれ？

目を開けると、雲の切れ間から太陽の光が差し込み、水面に反射していた。

：うそ！ 丸山さんの話と同じだ。

大地は、今までに経験したことのない温かく心地良い不思議な空気に包まれ、ずっとこのまま舟に揺られていたいと思つた。

：天国つてこんなところなのかな。

「惟神靈幸倍ませ」と唱える声にも気持ちが入り、胸に込み上げてくるものを抑えて

いた。

りゆうぐう丸は、ほどなく大八洲に接岸。一同は舟から下りて草履を履き、石段を上がり、大八洲神社前で先達に合わせて天津祝詞を奏上。“みろくの大神さま”に、このたび大道場修行を受講できたことを感謝申し上げた。

「皆さまは、修行を通して神さまのみ教えをいただき、国祖の神さまの弟子となられました。みろくの世建設という尊いご神業にお仕えすることをお誓いになつたわけですから、これから、それぞれができるご用に精いっぱいお励みくださいますようお願いいたします。五日間、本当にご苦労さまでございました」

「ありがとうございました」

一同、晴れやかに声をそろえた。

りゆうぐう丸が舟着き場に戻ると、天からは再び、小雨がぱらついてきた。

神苑の景色を映しながら風に揺れる水面は、まるで天国の姿を写し出しているかのようであつた。

(続く)